博多（はかた） 124

－博多遺跡群第167次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第994集

2008

福岡市教育委員会

はか　　た

博　多　124

－博多遺跡群第167次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第994集

調査番号　０６４７
遺跡略号　HKT－167

２００８

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、今も尚、さかんに都市開発が推し進められています。殊に博多部の再開発は著しく、小路に面した住宅地は高層ビルに建て替えられています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、天與庵の納骨堂建設に先立って実施した博多遺跡群第167次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代後半と古代末の竪穴住居跡や土壙のほか幕末から明治時代初めの墓地が発見されました。殊に古墳時代後半の竪穴住居跡は、博多濱における弥生時代から古墳時代にかけての集落域の拡がりを解明する上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、考古学や地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、天與庵の代表役員久保田継哉氏をはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成20年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　　山田　裕嗣

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が天與庵の納骨堂建設に先立って、2006（平成18）年10月20日から2007（平成19）年1月24日までに福岡市博多区博多駅前1丁目176－1において発掘調査した博多遺跡群第167次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、井戸跡をSE、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して001から始まる3桁の№を付した。また、遺構№の巻頭には、検出面を示す1・2の数字を付した4桁の№で表示した。
4．本書に掲載した実測図は遺構を小林義彦が、遺物は小林と今村ひろ子が作成した。
5．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6．本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
7．本書の執筆・編集は小林が行った。和鏡や六道銭など近世墓から出土した副葬品の調査は片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）があたり、その分析結果は巻末に付論として収録した。
8．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．発掘調査にいたるまで …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
　3．立地と歴史的環境 …… 4
Ⅱ．調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　2．基本的層序 …… 9
　3．第１面の調査 …… 10
　　1）土　壙 …… 10
　　2）井戸跡 …… 16
　　3）その他の遺構 …… 18
　4．第２面の調査 …… 24
　　1）竪穴住居跡 …… 24
　　2）土　壙 …… 27
　　3）包含層出土の遺物 …… 32
　5．小　結 …… 35

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／25,000）…… 2
Fig. 2　博多遺跡群調査区位置図（1／10,000）…… 3
Fig. 3　博多遺跡群第167次調査区位置図（1／600）…… 5
Fig. 4　博多遺跡群第167次調査区周辺現況図（1／500）…… 6
Fig. 5　近世桶棺墓人骨埋葬状況（北より）…… 7
Fig. 6　第１面遺構配置図（1／100）…… 8
Fig. 7　第１面全景（北より）…… 9
Fig. 8　1001号土壙実測図（1／20）…… 10
Fig. 9　1001号土壙上層遺物出土状況（北より）…… 11
Fig. 10　1001号土壙下層遺物出土状況（北より）…… 11
Fig. 11　1001号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 12
Fig. 12　1002号土壙実測図（1／30）…… 13
Fig. 13　1002号土壙（東より）…… 13
Fig. 14　1002号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 14
Fig. 15　1025・1027号土壙実測図（1／30）…… 14
Fig. 16　1025～1027号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 15
Fig. 17　1050号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 15
Fig. 18　1053号土壙実測図（1／20）…… 16
Fig. 19　1053号土壙（東より）…… 16
Fig. 20　1053号土壙出土遺物実測図（1／6）…… 17
Fig. 21　1054号井戸跡実測図（1／30）…… 18

Fig. 22 1054号井戸跡（東より） …… 18
Fig. 23 1003・1054号井戸跡出土遺物実測図（1／3） …… 19
Fig. 24 1013・1014号ピット実測図（1／20） …… 19
Fig. 25 1013・1014号ピット（西より） …… 19
Fig. 26 1011・1012号ピット基礎石断面（東より） …… 20
Fig. 27 1034号ピット実測図（1／20） …… 20
Fig. 28 1034号ピット（西より） …… 20
Fig. 29 1001号土壙・1034・1036号ピット（西より） …… 20
Fig. 30 1036号ピット実測図（1／20） …… 21
Fig. 31 1036号ピット（北より） …… 21
Fig. 32 1052号ピット実測図（1／20） …… 21
Fig. 33 1052号ピット（東より） …… 21
Fig. 34 ピット出土遺物実測図（1／3） …… 22
Fig. 35 第2面遺構配置図（1／100） …… 23
Fig. 36 第2面全景（北より） …… 24
Fig. 37 2005・2006号住居跡実測図（1／60） …… 25
Fig. 38 2005・2006号住居跡（北より） …… 26
Fig. 39 2005号住居跡（北より） …… 26
Fig. 40 2006号住居跡（北より） …… 26
Fig. 41 2005・2006号住居跡出土遺物実測図（1／3） …… 27
Fig. 42 2001号土壙実測図（1／20） …… 27
Fig. 43 2001号土壙（南より） …… 27
Fig. 44 2002・2003号土壙実測図（1／20） …… 28
Fig. 45 2002・2003号土壙（北より） …… 28
Fig. 46 2004号土壙実測図（1／20） …… 29
Fig. 47 2004号土壙（南より） …… 29
Fig. 48 2008・2018号土壙実測図（1／30） …… 30
Fig. 49 2008号土壙（南より） …… 30
Fig. 50 2009号土壙実測図（1／20） …… 31
Fig. 51 2019号土壙実測図（1／30） …… 31
Fig. 52 2019号土壙（東より） …… 32
Fig. 53 2018・2019号土壙出土遺物実測図（1／3） …… 32
Fig. 54 2024号土壙実測図（1／20） …… 33
Fig. 55 2030号土壙実測図（1／20） …… 33
Fig. 56 2030号土壙（南より） …… 34
Fig. 57 第Ⅰ層出土遺物実測図（1／3） …… 34
Fig. 58 包含層出土遺物実測図1（1／3） …… 35
Fig. 59 包含層出土遺物実測図2（1／3） …… 36
Fig. 60 包含層出土遺物実測図3（1／3） …… 37
Fig. 61 包含層出土遺物実測図4（1／4） …… 38
Fig. 62 出土遺物1（縮尺不同） …… 39
Fig. 63 出土遺物2（縮尺不同） …… 40

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

古代の昔から貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の窓口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なり合った様々な遺構が眠っている。21世紀の今日、メイン道路に面した博多の町には大規模な高層ビルが建ち並んでいる。都市空間の有効活用を図った高層ビル化の傾向は、路地に面した旧市街地にも及び、古い博多の家並みはビルの谷間に消えつつある。

2006（平成18）年６月28日、天與庵の代表役員久保田継哉氏より同庵の納骨堂建設に先立って、埋蔵文化財の事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。この地は、石堂川の左岸に沿った博多遺跡群の東南縁に位置し、西隣の商業ビル建設時に実施された第109次調査では、埴輪を伴った前方後円墳を発見している。そのため当該地にもこの期の遺構や遺物が濃密に拡がっていることが予想できることから同年７月18日に試掘調査を実施した。その結果、地表下1.3m～2.0mの深さに遺物包含層があり、この間に２面の遺構面が残っていた。この納骨堂の建設は、平成17（2005）年３月20日の福岡西方沖地震によって被災した本堂のお骨を安置するもので、すでに施工業者にも発注され、盂蘭盆会までの竣工が強く望まれていることから早急な発掘調査が必要となった。

発掘調査は、平成18（2006）年10月20日に表土層を除去から始めた。厚い表土層下には墓石を無造作に埋め込んだ撹乱壙が広範囲に拡がり、陶器甕を棺とした未改葬の近世墓が数多く残り、その棺内には埋葬骨が眠っていた。この想定外の事態に、埋葬骨は専門業者に委託して天與庵に仮安置し、後日納骨堂に安置する。墓石は一括して場内に仮保管し、篤く供養して納骨堂の礎とする。また、排土置き場の減少は場外に搬出することで用地を確保し、調査は大きく進捗した。しかしながら、最終的な近世墓の数は当初の２倍半に及ぶ100基を超し、その作業に多くの時間と労力を要した。この間、天與庵の久保田継哉氏は忙しい中を埋葬骨の改葬にご一緒下さった。また、松井建設株式会社の田代氏には二度にわたって排土の搬出を依頼して協力を得、古代末～中世初めと古墳時代の２時代の調査をして平成19（2007）年１月24日に無事終了した。この年は、寒さが一段と厳しい冬であったが、久保田継哉氏をはじめ多くの関係者諸氏のご理解とご協力および寒風下で発掘作業に従事された方々の労苦に感謝し、ここに記して改めて謝意を表します。

2．発掘調査の組織

調査委託　宗教法人　天與庵
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財第１課
　　埋蔵文化財第１課長　山口譲治
　　埋蔵文化財第１課調査係長　米倉秀紀（現任）　山崎龍雄（前任）
調査庶務　文化財管理課　榎本芳治（課長）　鈴木由喜（担当）
調査担当　埋蔵文化財第１課　小林義彦
調査・整理作業　石橋陽子　伊藤美伸　今村ひろ子　大瀬良清子　兼田ミヤ子　小島君子　坂梨美紀　知花繁代　塚本よし子　土斐崎孝子　西田文子　野田淳一　馬場イツ子　濱フミコ　播磨博子　福田操　松尾千寿　松下さゆり　三栗野明美　森田祐子　矢川みどり　山口慶子　吉川貴久

発掘調査にあたっては、山口譲治、比佐陽一郎、片多雅樹氏に懇切な指導と助言を受けた。協力に感謝申し上げるとともに本報告に十分に生かせなかったことを深くお詫びする次第である。

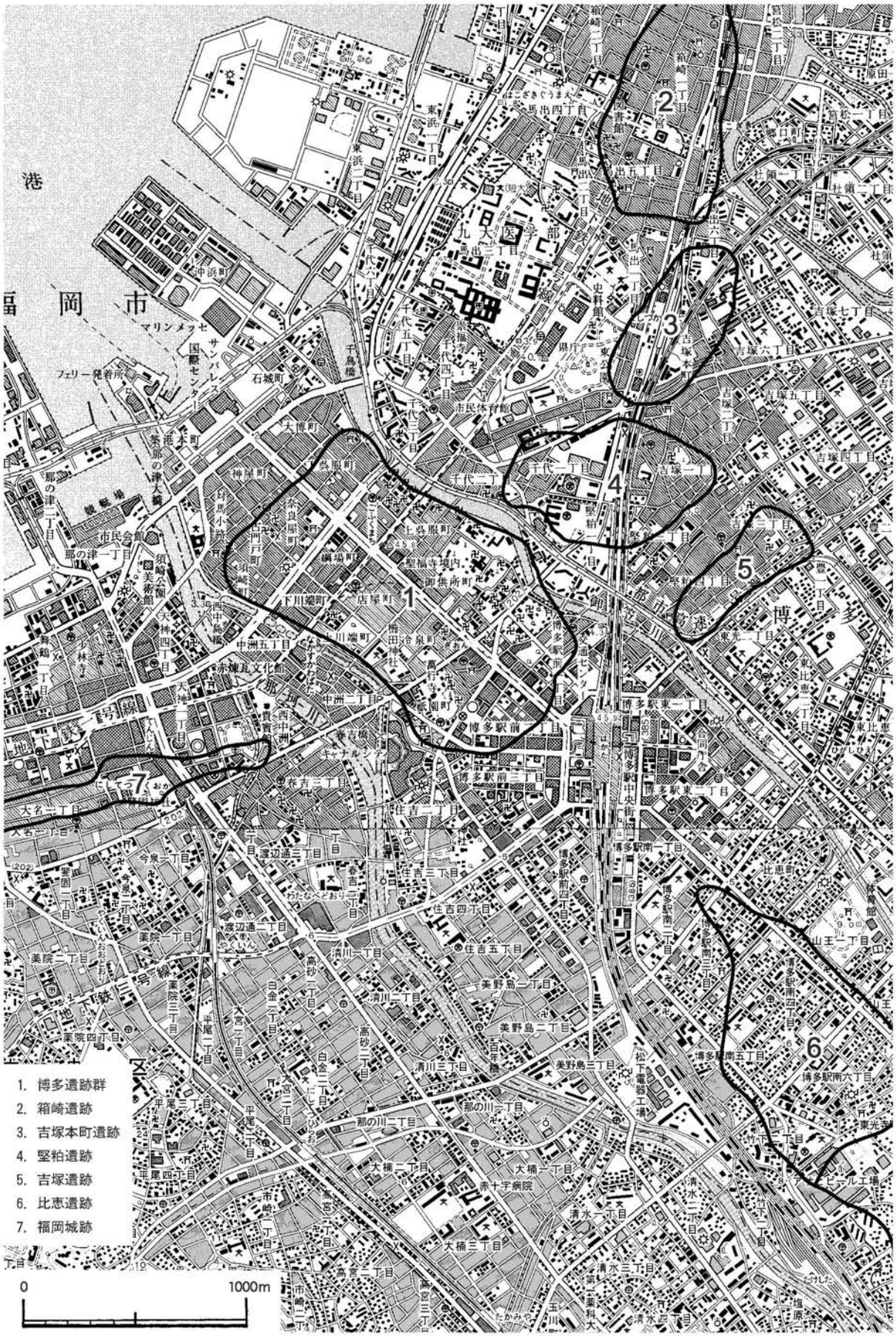

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

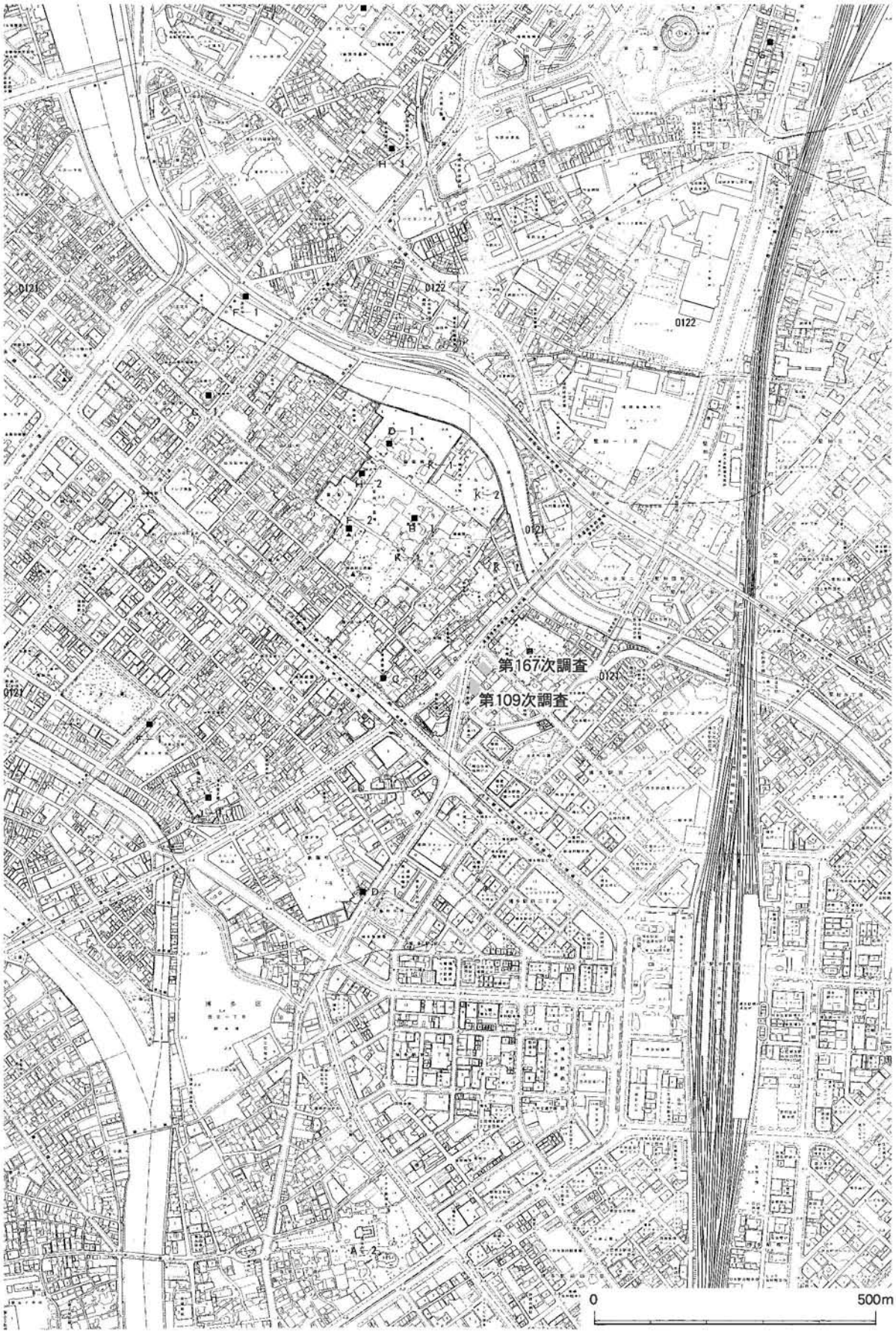

Fig. 2　博多遺跡群調査区位置図（1/10,000）

3．立地と歴史的環境

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、御笠川と那珂川の二筋の大きな流れが河口を接して博多湾に注いでいる。博多遺跡群は、この二つの河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画されている。

この博多湾に面した東西400m、南北1,000mの古砂丘上に立地する博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連綿とつづく大複合遺跡である。殊に、古代には中国や朝鮮半島からの陶磁器類の輸入窓口として、また、中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、これまでに200ヶ所を超す地点で発掘調査が実施され、二千年余りにおよぶ歴史の全貌が次第に明らかになりつつある。

この博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代前期後半に遡る。はじめに祇園町交差点を中心とする古砂丘上に住居跡群や甕棺墓群が営まれる。ここは博多遺跡群を構成する二つの古砂丘のうち、陸側の古砂丘「博多濱」のほぼ中央部で、古砂丘の最高所にあたり、中期から後期には東から南の後背地に向かって遺構は大きく拡がっていく。

次の古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北の上呉服町周辺まで遺構は拡がっていくが、遺跡の中心はまだ「博多濱」の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが調査されている。古砂丘東側の第28次調査区では、墳丘長が56mを超える5世紀前葉に造営された前方後円墳の「博多1号墳」が、また第109次調査区では形象埴輪を伴う6世紀代の前方後円墳「博多2号墳」も確認されており、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として位置づけられる。

更に、「那の津」の官家が設置された536（宣化1）年以降、古代になると博多遺跡群は対外貿易の拠点都市としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に亘って拡がっていく。688（朱雀3）年に初見する「筑紫館」、842（承和9）年以降に現れる「大宰府鴻臚館」は、博多遺跡群から入り海ひとつを隔てた丘陵上に位置している。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式瓦や老司式瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帯、墨書須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器のほかに越州窯系青磁、長沙窯系陶器などの多種多様な輸入陶磁器が出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。一方、909（延喜9）年の遣唐使の廃止は、私貿易の隆盛を促すこととなり、古代末からは対宋貿易の中心地となる。発掘調査で検出される遺構や遺物の多くは、11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には「博多濱」北限を画す潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で北の古砂丘「息の濱」と繋がる。

鎌倉時代には、「息の濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通して供用されるが相互間の規則性や統一性を有しているとは云い難い。しかしながら、これらが中世後半期における都市「博多」の町並みの概観を示しているといえよう。一方で、「元寇の役」の後には鎮西探題府が置かれ、対外貿易都市としての機能のみならず西国の政治的中心地としての側面も備えてくる。

室町時代には、「息の濱」が一層の発展を遂げ、博多の都市機能の中心は内陸側の「博多濱」から海側の「息の濱」へと移る。「息の濱」の商人たちは、朝鮮半島や中国大陸のみならず、遠く東南アジアにまで進出していく。このことはベトナムやタイ製の陶磁器の出土によって裏付けられる。また、博多にも和冠の記録があり、海賊である和冠によって民間貿易が担われていた側面も窺える。一方、

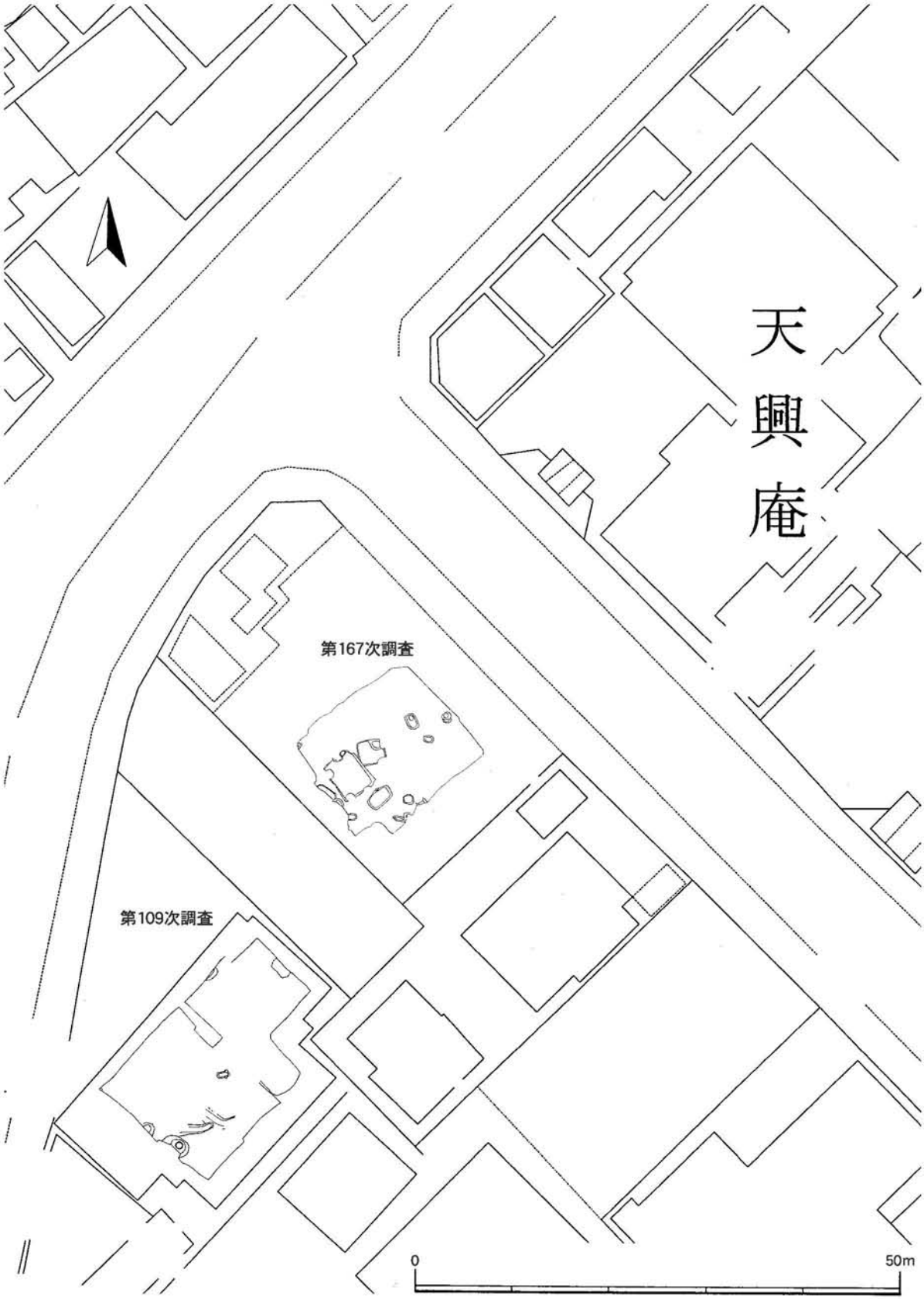

Fig. 3　博多遺跡群第167次調査区位置図（1/600）

政治的には足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕的勢力が強く、その政治力や軍事力は強大なものとはなり得なかった。

第167次調査区のある博多駅前は、「博多濱」が東方の堅粕～吉塚遺跡へと続く古砂丘の東斜面に占地している。これまでに第28次調査をはじめ、17・20・31・37・109・128次調査など10地点余りで発掘調査が実施されている。「博多濱」の東縁では、前述のように古砂丘の最頂部にあたる祇園町周辺で弥生時代中期前半に甕棺墓地が営まれたことに始まる。第109次調査区や17・20・37・128次調査区では中期～後期の遺構が拡がっている。その後、第109次調査区などで方形周溝墓が、続いて5世紀前葉～6世紀には第28・31次調査区で「博多1号墳」が、第109次調査区では「博多2号墳」の2基の前方後円墳が相次いで造営されている。また、37次調査区では5世紀代の滑石製の玉類を副葬した木棺墓が検出されており、「博多濱」東縁が墳墓地として土地利用されていたことが顕著に窺える。反面、集落遺構は希薄で6世紀後半代に再び集落域として遺構が展開する。律令期には第17次調査区で蛇尾が出土しており、瓦などの出土と併せて官衙的施設の存在が想起されている。続く平安時代後期～末には貿易拠点としての都市機能が「博多濱」に移り、宋商人の居住によって多彩で膨大な陶磁器類が各調査区で確認されている。また、12世紀後半に出現する溝は後世の基幹道路として継承される。これは博多綱首によって承天寺や聖福寺などの禅刹が建立されたことに発するものであろう。本調査区は承天寺の寺域にあり、かつては広大な寺域に43区の塔頭があったが元禄の頃には14区に減じ、今は天與庵、宝聚庵、祥勝院、乳峯寺の4寺が現存するのみである。

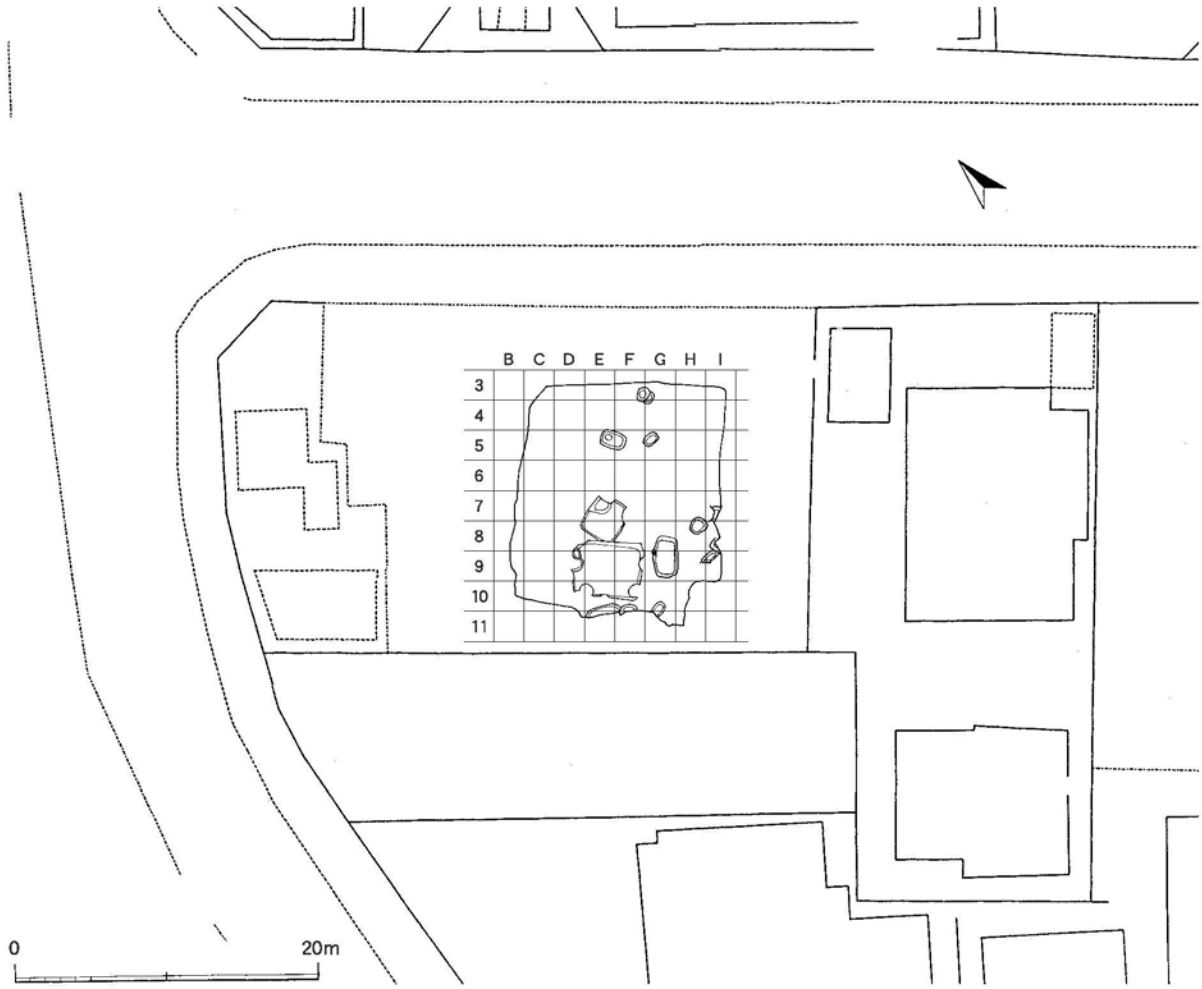

Fig. 4　博多遺跡群第167次調査区周辺現況図（1/500）

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

第167次調査区は、博多遺跡群を形成するふたつの古砂丘のうち陸側にある「博多濱」の東南部に位置する。ここは古砂丘の最高所が堅粕遺跡へと繋がる鞍部（石堂川）の浅みにむかって緩やかに傾斜をはじめる東辺に立地している。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの長きにわたって人々がその営みを刻み込んできた大複合遺跡で、基盤層の黄白色砂層までの間には１～５ｍにもおよぶ遺物包含層が堆積している。この遺物包含層には幾面もの生活面（遺構面）が重層的にあるが、基盤層上に堆積した茶褐色砂層を除いて堆積土壌の変化は明確ではない。仮に良好な整地層が確認されても面的な拡がりとしてはほとんど捉えがたいのが現実で、厳密に単一時期の遺構面を検出することは不可能である。近代の撹乱層を取り除くと稀に近世の遺構面があるが、一般的には中世の遺構面が検出される。このため発掘調査では、はじめに撹乱層を取り除いた上で安定した面まで意識的に掘り下げて遺構面を調査した。その後、さらに包含層を掘り下げて下層の遺構面を検出すると云う方法をとった。第167次調査区では、整地層上（第１面）とその整地層の下にある黄白色の基盤砂層上（第２面）で２面の遺構面を検出した。この２面の遺構面の間には、幕末～明治時代初期の近世墓群があり、この近世墓面を第０面と仮称し、２面の遺構面に挟まれた遺物包含層を第Ⅰ層とした。この遺物包含層（第Ⅰ層）は弥生時代～中世の遺物を含む厚い層で、この層中から掘り込まれた遺構も見受けられたが、断片的で確実なものは把握できなかった。また、各面の遺構の時期は、属する遺構面の年代に必ずしも対応するものではない。

このような条件下で発掘調査に着手したが、予測に反して地下室のレンガ壁や撹乱壙が深く広範囲にわたって拡がり、想定外の時間を要した。また、遺構の検出面やその直上から改葬済みとされていた近世甕が多数検出され、撹乱構内には墓石等が投棄されていた。そこで協議の結果、40基の甕棺および埋葬人骨は、国松石材に委託して改葬し、墓石は埋蔵文化財課が調査区外に仮保管することに

Fig. 5　近世桶棺墓人骨埋葬状況（北より）

なった。しかし、調査の進捗に従って、第Ⅰ層や基盤層からも甕棺墓や桶棺墓が多数検出され、その数は併せて100基を超えた。甕棺墓や桶棺墓には埋葬人骨が残っていたが、新しい時代の人骨ゆえに支障も多く、その改葬に１ヶ月余の時間を要した。これらの改葬作業は、随時埋蔵文化財課で実施したが、天與庵住職の久保田継哉氏も一緒に汗を流された。このように近世墓が地中深くまで幾層にも埋葬されているのは、この地が長く承天禅寺の塔頭であったことに起因するものであろう。また、墓石の仮保管所を優先的に確保すると、広く深い撹乱壙や遺構の排土を仮置きするスペースが制約された。その解決策として施工者の松井建設に再度の負担を願い、２回にわたって排土を場外に搬出した。

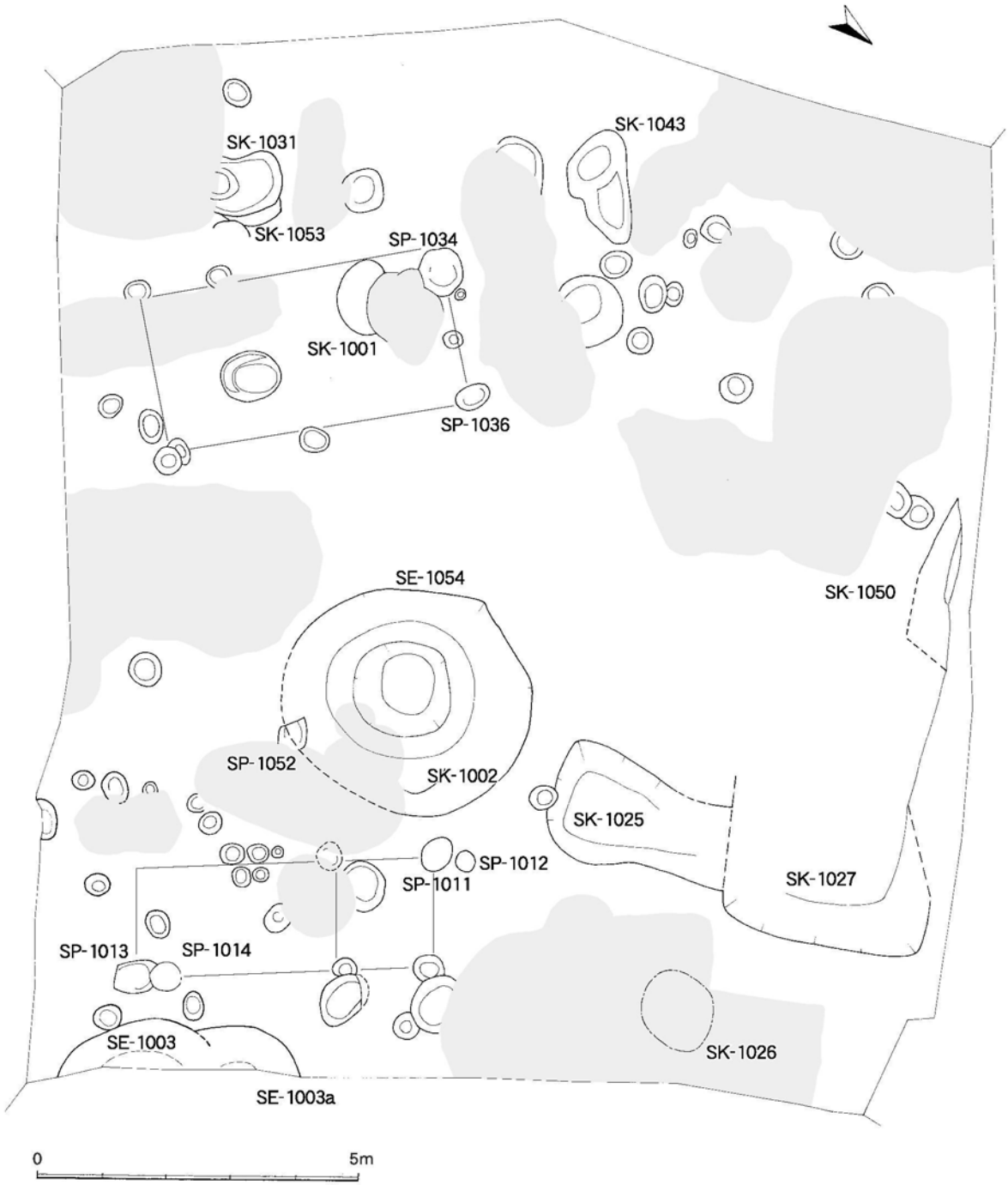

Fig. 6　第１面遺構配置図（1/100）

発掘調査の結果、古墳時代後期～中世までの２面の遺構面を確認した。第１面は、古代末～中世前半の時期で土壙や井戸跡を検出した。第２面は、基盤層に掘り込まれた遺構面で、古墳時代後期の竪穴住居跡と古代の土壙を混在して検出した。この第１面と第２面の間の包含層は、暗灰黒色砂土層と茶褐色砂層の２層からなる。このうち上層の暗灰黒色砂土層には、層中から掘り込まれたピット状の遺構はあったが、レヴェル的に安定せず、数的にも少ないことから遺構面としては確認できなかった。また、第１面の上層には、近世墓を掘り込んだ幕末から明治時代初めの遺構面（第０面）があるが、レヴェル的にはランダムで面的な拡がりも把握できなかった。このような困難な条件下にありながら多くの成果を残して2007（平成19）年１月24日に発掘調査を終えた。調査の中では、天與庵住職の久保田継哉氏と松井建設田代氏にご理解とご協力をいただいた。改めて謝意を表します。

２．基本的層序

第167次調査区は、博多遺跡群を形成する陸側の古砂丘「博多濱」の東南辺にあり、砂丘が東にある堅粕遺跡の砂丘にむかって緩やかな鞍部を形成する緩斜面の上縁部に立地している。この古砂丘は、風成砂層の淡黄色砂を基盤層（地山面）とし、黄白色砂層上に幾層もの人工的堆積層（遺物包含層）が厚く積もり、その中に古墳時代以降の各時代の生活面が掘り込まれている。この標高3.6m～4.0mの基盤層の上面には、淡黄灰色砂層が薄く堆積している。この砂層には網目状の層理が観察され、風成砂であることを物語っている。この淡黄灰色層の上に弥生時代中期から奈良時代の土器片を主に包蔵する茶褐色砂層（第Ⅰ層下層）が10～15cmほどの厚さで堆積している。更に、その上面には暗灰黒色砂土層（第Ⅰ層上層）が堆積している。この層は若干の変化を示しながら標高4.25～4.35mまで続いている。このうち上層は時空的に長く、層中から掘り込まれた遺構があることを勘案すれば、幾層かの遺構面が想起されるが現状では明らかにできなかった。また、上層は東が厚く、下層が西に厚い事実は、古代末から中世にかけて博多の街が急速に拡がっていったことを示している。

Fig. 7　第１面全景（北より）

3．第１面の調査

第１面は、現地表下130cmの標高4.2～4.3mで検出した遺構面である。第１面では、井戸跡２＋αと土壙７基のほかにピットを検出した。井戸跡は、調査区の中央部から南東隅に偏してあり、基盤層となる黄白色砂まで掘り込んでいる。いずれも素掘りで、完掘した1054号井戸跡の底面には薄い円形の井側痕が残っていた。土壙は、円～楕円形プランと方～長方形プランのものがあるが、いずれも小規模な廃棄壙的なもので墓壙を想起させるものは確認できなかった。また、ピットの中には扁平な自然石や礫石を敷いた明らかに建物の礎石と考えられるピットがあるが、削平が著しくひとつの建物遺構としてはまとまらなかった。

一方、この第 1面の遺構を検出したレヴェルより10～20cmほど上層から100基を超す近世墓を検出した。これらの近世墓は、戦後の撹乱層や第１面の遺構面上より掘り込まれている。しかし、なかには第２面の遺構調査時に検出したものもあり、これが埋納期の時間差かあるいは重複を避けたのかは俄には決しがたい。また、埋葬主体は大型の陶器甕と桶を用いたものの２種類がある。このうち甕棺は一般的に石蓋で覆蓋しているが、桶棺は石蓋で棺を覆うものは１例もない。そのため桶棺の埋納骨は遺存状況が悪く、その取り上げには労苦を要した。更に、これらの近世墓の棺内には和鏡や櫛、鋏、漆器類のほかに銅銭が副葬されていた。殊に銅銭は６枚あるいは12枚を基本とし、いわゆる六道銭の呼称に添うものである。なお、これらの副葬品については、片多雅樹氏（福岡市埋蔵文化財センター）が詳細に分析されており、参照されたい。近世墓の造墓期は、安政２年や明治12年卒と刻まれた墓碑銘から19世紀中葉の年代が与えられるが、天與禅庵の来歴を考えると19世紀以前に遡る可能性も考えられよう。

１）土　壙（ＳＫ）

土壙は６基を検出した。不整形で遺物の出土していないものは遺構番号を付与しなかった。プラン的には、方形～長方形のものと円形～楕円形のものとに大別され、方～長方形プランの土壙はやや大規模である。一方、円形～楕円形プランの土壙は小規模で遺物の出土状況を勘案すると廃棄土壙的機能が想起される。分布的には、プラン等による特定の拡がりはなく、ランダムに拡がっているものと思われるが、撹乱による消失が著しく情実は明らかでない。いずれにしろ、これは大小の調査区単位で捉えられることではなく、博多濱の全域を通し時期的な検討をも加味して考えることである。

1001号土壙　SK－1001

（Fig. 8 ～10）

1001号土壙は、調査区の南西部に位置する東西軸の廃棄土壙で、すぐ南には黄釉鉄絵盤が出土した1053号土壙がある。平面形は、長軸が117cmで短軸は80cmほどの楕円形プランをなし、主軸方位を

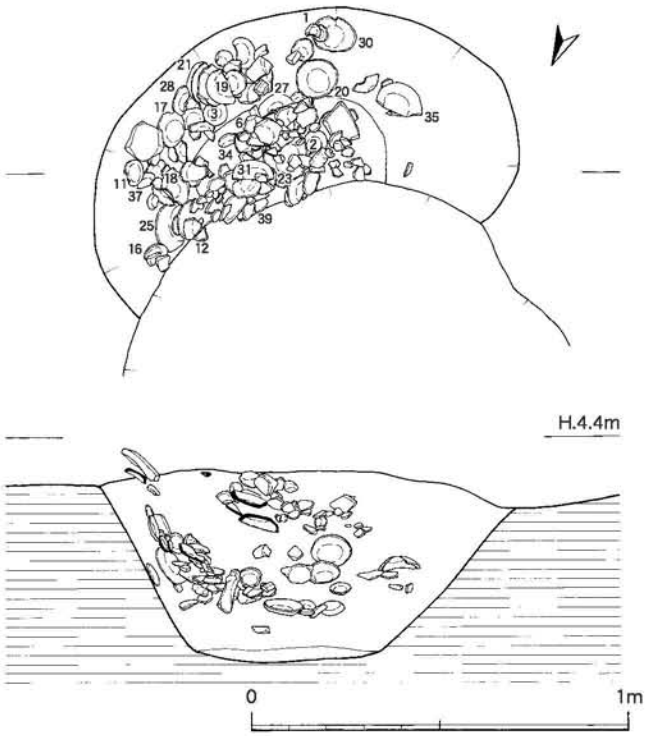

Fig. 8　1001号土壙実測図（1/20）

N－41°－Eにとる。深さが50cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。壙内には、多量の土師器坏や小皿のほか瓦器碗、青磁碗、瓦片などが廃棄されていた。これらの遺物は東側壁に貼り付くように厚く、西壁側はやや希薄な出土状況を示していた。また、上層と下層の間には遺物を含まない堆積層がある。これは初めに東壁側から投棄され、若干の時間差をおいて東南壁側から再び投棄されたことが想起される。覆土は暗灰褐色砂で、遺物より下層には祖砂粒を含んだ暗灰茶褐色砂が堆積していた。

出土遺物（Fig. 11・63）

1～16は土師器小皿である。口径が6～6.8cmのやや小さいもの（1～3・7・12）と7～7.4cmの大きいもの（4～6・8～11・13～16）がある。口縁部は内彎気味に外反し、体部の中位には緩やかな段を作る。底部は糸切り底で、1・8・10には板目圧痕がある。胎土は良質で、色調は淡黄橙色～橙色。6には油煙痕があり、灯明皿に転用している。17～38は土師器坏である。口径は11.4～15.6cmで、11.4～12cmのSサイズのもの（17～26・29～31）、12.4～13cmのMサイズのもの（27・28・32）、13.8～15.6cmのLサイズのもの（33～38）の3タイプに大別される。このうちSサイズの口縁部は内彎気味に外反し、M・Lサイズのものはストレートに外反する。底部は糸切りで31と32には板目痕がある。胎土は良質で、淡黄橙色～淡橙色。

Fig. 9　1001号土壙上層遺物出土状況（北より）

1002号土壙

SK－1002

（Fig. 12・13）

調査区の東南部に位置する東西軸の土壙である。西壁は1054号井戸跡に、南壁は撹乱壙によって削平されているが、平面形は長辺が160cm、短辺が120cmほどの楕円形プランをなそう。壁面は南壁側がやや急峻に、北壁側はやや緩やかに立ち上がり、壁高は70cmを測る。覆土は、濃灰褐

Fig.10　1001号土壙下層遺物出土状況（北より）

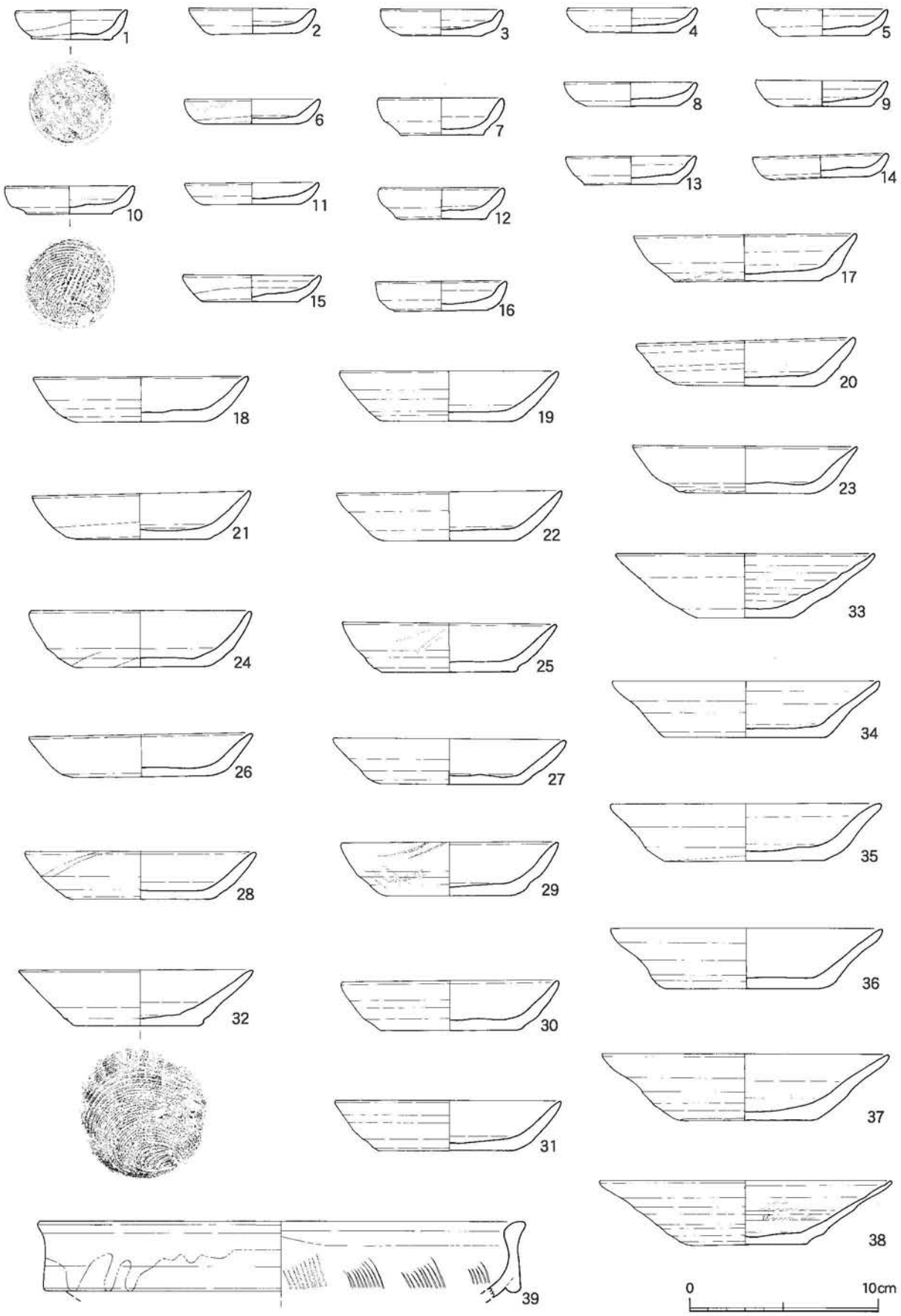

Fig.11　1001号土壙出土遺物実測図（1/3）

色～暗褐色砂が互層的に堆積していた。遺物は、土師器坏や土師器小皿のほかに青磁碗、白磁碗と平瓦片が北壁から壙央に比較的まとまった状態で出土した。また、覆土に混じって被熱した粘土塊や坩堝片が出土したが、壁面等の被熱痕は観察されなかった。

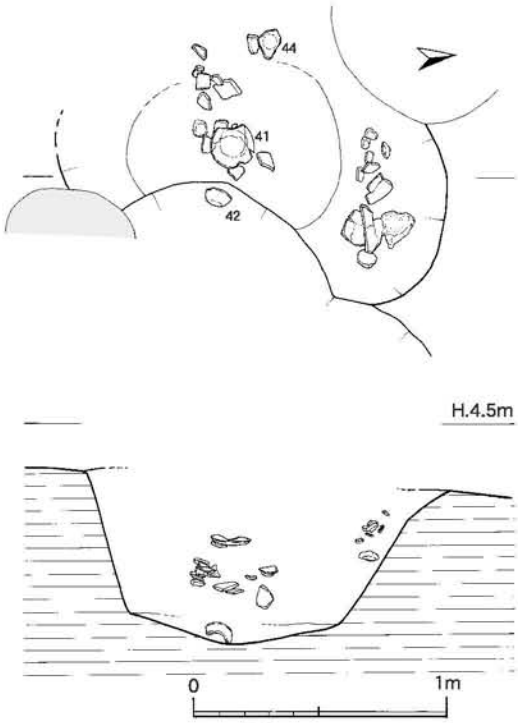

Fig.12　1002号土壙実測図（1/30）

出土遺物（Fig. 14・62）

40は土師器小皿で、口径8.4cm、底径６cm、器高は１cm。口縁部はストレートに外反し、底部はやや上げ底で糸切り後に板目圧痕。油煙の付着があり、灯明皿に転用。41は口径が16.2cm、底径が10.9cm、器高が３cmの土師器坏。底部は回転糸切りで、体部はストレートに外反する。胎土は良質で、色調は淡黄橙色。42はⅨ類の白磁碗で、口径は16.6cm。無文の見込は蛇の目釉剥ぎ。43は口径が16.6cmの高麗青磁碗で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。体部には線刻と圏線で施文しているが氷裂がある。灰色の胎土に暗緑色の釉薬を施釉する。44は高台径が5.6cmを測る同安窯系Ⅱ類の青磁碗。外面には片切彫の縦線を放射状に刻み、オリーブ色の釉薬を施釉している。45は口径が10.8cm、高台径が3.8cm、器高が5.6cmを測る匙口の天目碗である。明茶褐色の胎土に茶～黒褐色の釉薬を高台上まで施釉している。46は直径が2.4cm、厚さが1.9～2.1cmの石製球である。

1025号土壙　ＳＫ－1025（Fig. 15）

調査区中央部の東壁寄りにある南北軸の大型土壙で、北壁は1027号土壙に切られている。平面形は、東西長が65～90cm、南北長が180cmほどの側壁中央部が括れた不整形な長方形プランをなそう。N－31°－Wに主軸方位をとる。深さが60cmの壁面は、緩やかに立ち上がる。壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形を呈する。覆土は暗灰茶褐色砂土の単一層で、須恵器片や土師器片のほかに瓦器椀、青磁碗、白磁碗、陶器片が出土した。

出土遺物（Fig. 16・62）

47～49は土師器坏で口径は14.2cmある。47は底径が9.8cm、器高は３cmで、底部は回転糸切り。48は底径が10.6cm、器高は2.8cmで、底部は回転糸切り後に板目痕。49は10.4cm、器高は2.5cmで底部は糸切り後に板目痕。油煙痕があり灯明皿に転用か。胎土は良質で、色調は淡黄色

Fig.13　1002号土壙（東より）

～橙色。50は高台径が4.8cmの青磁碗で体部には１条の圏線が巡る。畳付～高台内は赤茶色の露体で、墨書がある。51は龍泉窯系Ｉ－９類の青磁碗である。口径は15.6cm、高台径は6.6cm、器高は７cm。口縁部は短く外方に摘み出す。胎土は緻密な灰ベージュ色で、オリーブ色の釉を施釉し、畳付と高台内は露胎。52は底径が４cmの龍泉窯系青磁皿である。灰黄色の胎土に淡オリーブ色の釉を施釉し、底部は露胎。53はⅣ－ｃ類の白磁皿で、口径は9.6cm、底径は3.2cm、器高は2.3cm。見込には劃花文を描き、底部は釉剥ぎ。灰ベージュ色の胎土に透明釉を施釉している。

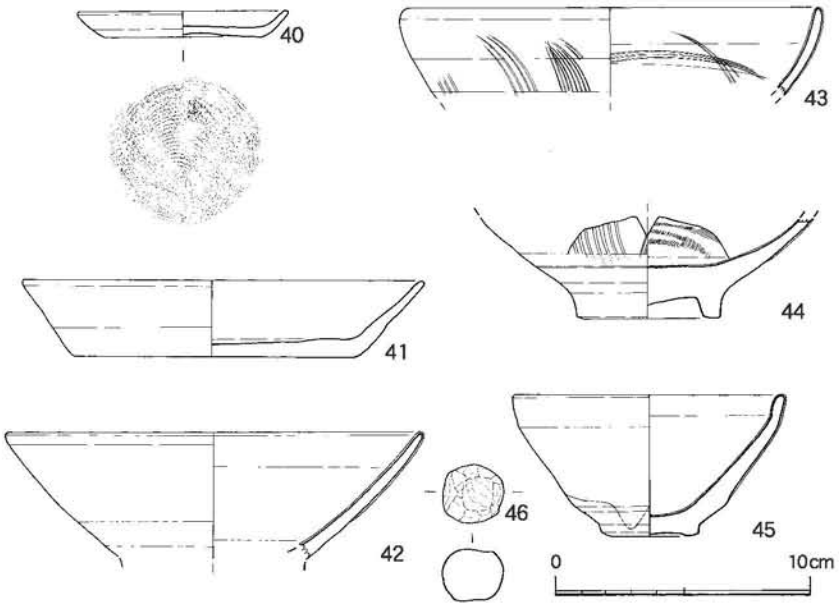

Fig.14　1002号土壙出土遺物実測図（1/3）

1026号土壙　ＳＫ－1026（Fig. 6・16）

調査区の北東隅に位置する土壙で、すぐ西には1025・1027号土壙がある。平面形は、直径が110～130cmの楕円形プランを呈する。壁面は、近世墓の桶棺を埋置した墓壙のようにほぼ垂直に立ち上がるが、100cmほど掘り下げたところで壁面が崩落したために完掘を断念した。覆土は黒色～灰黒色の粘性土で、土師器坏や小皿片がまとまって廃棄されていた。墓壙を示唆する人骨は出土していない。

出土遺物（Fig. 16）

54は土師器小皿で口径は7.9cm、底径は5.7cm、器高は1.4cm。器肉は厚く、糸切りの底部はやや上げ底状をなす。胎土は良質で、淡黄橙色。油煙痕があり、灯明皿に転用している。55～58は土師器坏。55は口径が12.6cm、底径は8.6cm、器高は３cmで口縁部はストレートに外反し、底部は糸切り。56～58は口縁部が内彎気味に立ち上がり、口径は56が12.6cm、57が13.2cm、58が13cm。底径は56が８cm、57が8.8cm、58が９cm。器高は56が

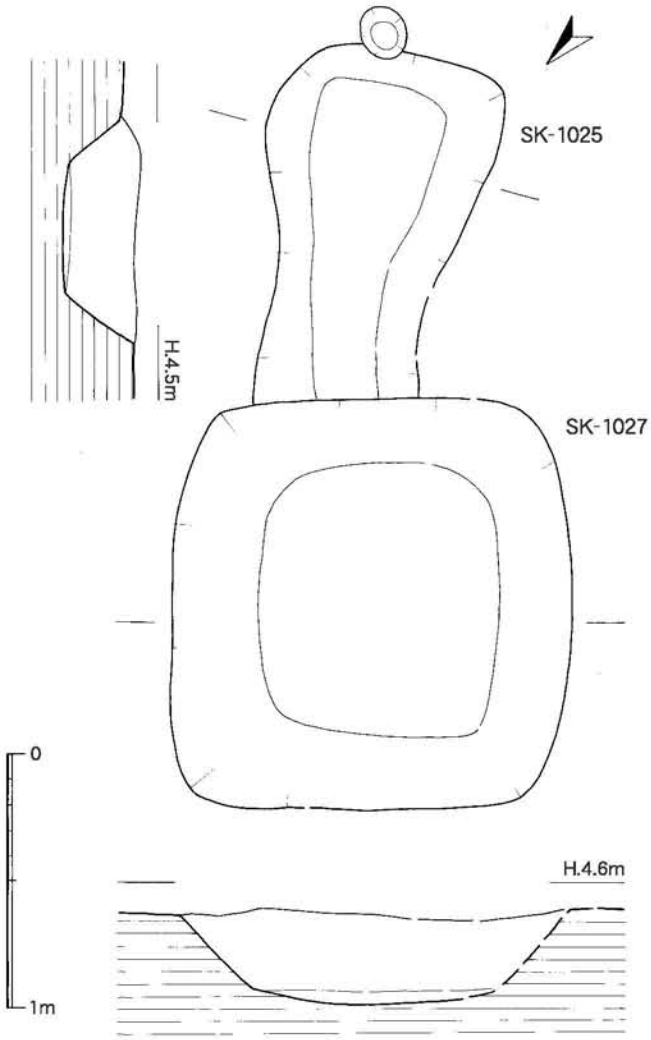

Fig.15　1025・1027号土壙実測図（1/30）

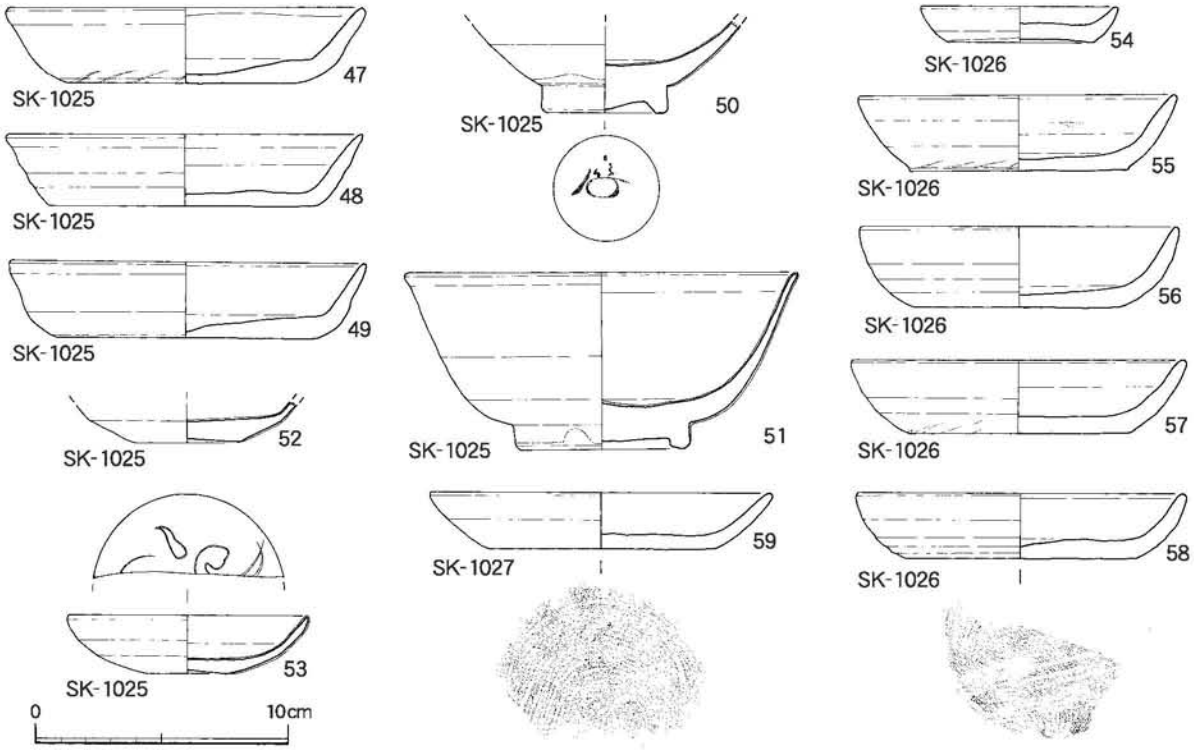

Fig.16　1025～1027号土壙出土遺物実測図（1/3）

3.3cm、57が2.9cm、58は2.6cm。底部は糸切りで、58には板目圧痕が残る。また、油煙痕があり灯明皿への転用品か。胎土は良質。

1027号土壙　ＳＫ－1027　(Fig. 15・16)

調査区の北隅に位置する大型の土壙で、南壁は1025号土壙の北壁を切っている。西壁は、排土搬出用のベルトコンベアによって損壊したが、平面形は一辺が350cmほどの隅丸方形プランをなそう。壁面は、比較的緩やかに立ち上がり、深さは85cmを測る。壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は緩やかな逆台形をなしている。覆土は濃褐灰色砂土の単一層で、須恵器や土師器、瓦器のほかに青磁、白磁、陶器片と滑石片が出土した。

出土遺物（Fig. 16）

59は口径が13.6m、底径が8.8cm、器高が2.4cmの土師器坏である。口縁部は内彎気味に外反し、平底の底部は糸切り。胎土は良質で、色調は淡黄橙色。

1050号土壙　ＳＫ－1050　(Fig. 6)

調査区北壁際の中央部に位置する方形～長方形プランの土壙で、その大半が調査区外に拡がっているために全容は明らかでない。覆土は、暗灰褐色砂で、遺物は須恵器片や土師器片のほかに青磁小皿や白磁碗、天目碗片がわずかに出土した。

出土遺物（Fig. 17・62）

60は口径が10.2cm、底径が5.2cm、器高が2.2cmを測るⅡ類の青磁小皿である。見込には櫛描きの施文がある。灰色の胎土は緻密で、淡いオリーブ色の透明釉を体部下半まで掛け流している。同安窯系。61は口径が9.6cm、底径が3.4cm、器高が2.5cmの青磁平底皿である。胎土は緻密な灰色で、オリーブ色の釉薬を掛け流しているが、底部は鉄釉が施釉されている。龍泉

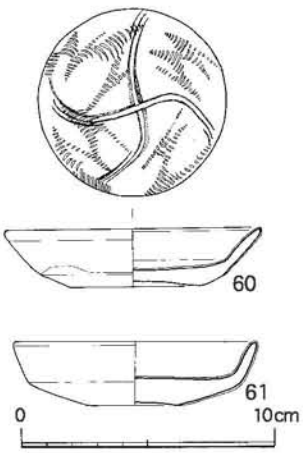

Fig.17　1050号土壙出土遺物実測図（1/3）

窯系Ⅲ－a類。

1053号土壙　ＳＫ－1053　(Fig. 18・19)

調査区の南隅に位置する南北軸の小土壙で、すぐ北には1001号土壙がある。南壁が削平されているが、平面形は短軸が90cm、長軸が115 cmほどの楕円形プランをなそう。深さは45cmで、壁面はやや緩やかに立ち上がり、深さは45cm。断面形は浅い舟底状をなし、壙底は凹レンズ状を呈している。覆土は灰褐色～灰茶褐色砂の互層で、構内には破砕した黄釉鉄絵盤に混じって青磁片や白磁片、須恵器、土師器片が出土した。

出土遺物（Fig. 20・62）

62は口径が39.6cm、底径が32cm、器高が11cmの黄釉鉄絵花文盤である。口縁部は断面が菱形をした玉縁口縁で、多数の目跡がある。見込には花弁文と波状文を描いている。胎土はやや脆い灰～暗灰色土で、口縁部から見込には不透明な灰オリーブ色の釉薬を施釉する。12世紀前半の磁竈窯系。

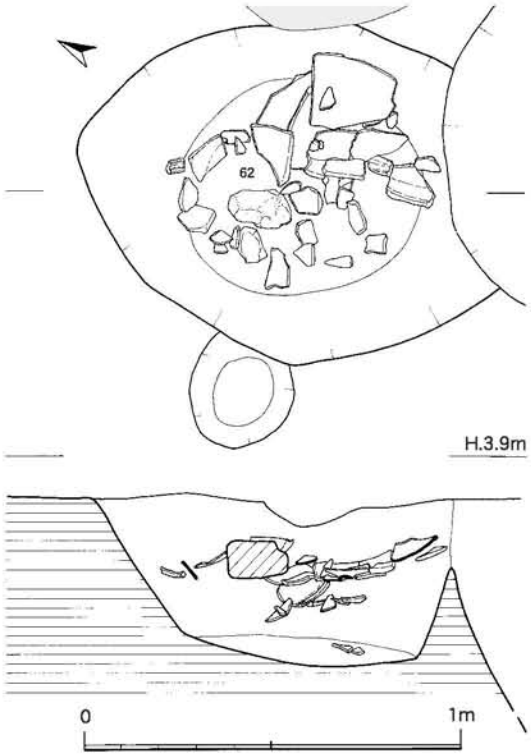

Fig.18　1053号土壙実測図（1/20）

2）井戸跡（SE）

第１面では３基の井戸跡を検出した。この３基のほかには古砂丘の基盤をなす黄白色砂層まで掘り込んだ井戸跡と考えられる遺構はなく、本調査区ではこれが井戸跡の総数と考えて差し支えはあるま

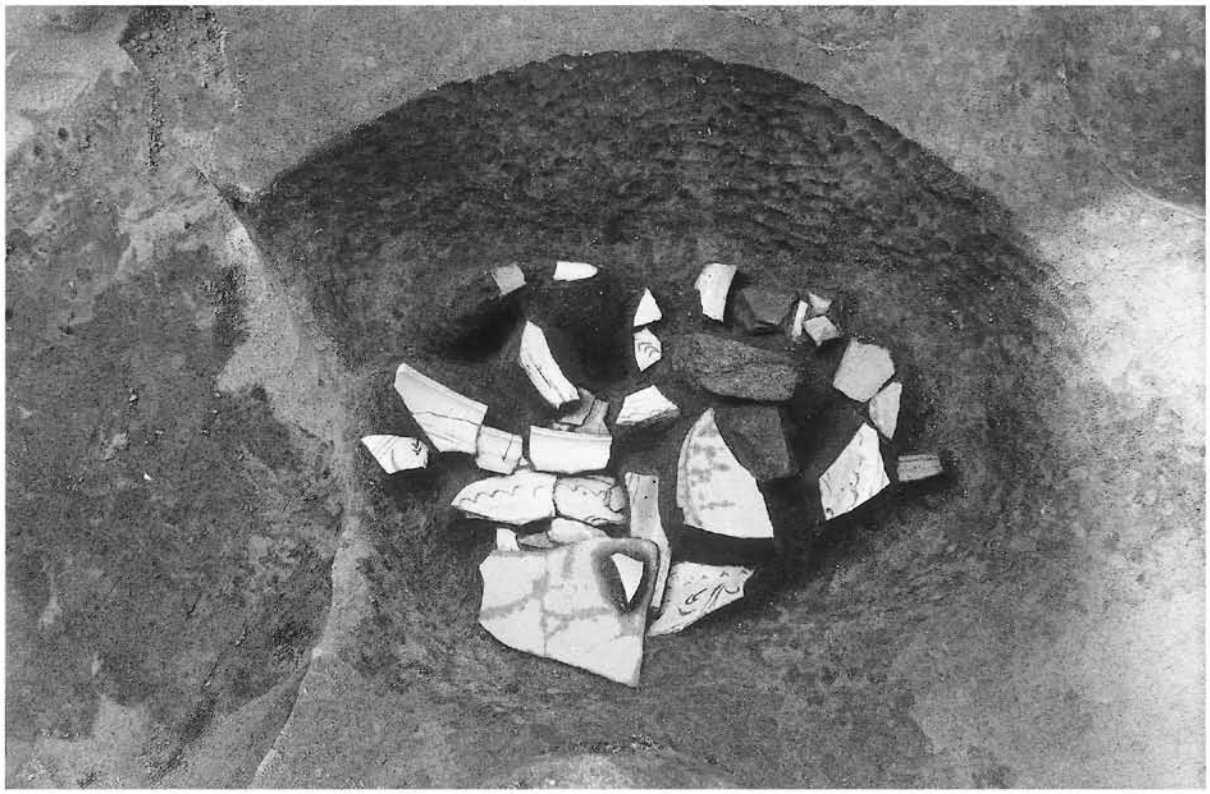

Fig.19　1053号土壙（東より）

い。井戸跡はいずれも素掘りで構造の明らかな1054号井戸跡は、井側に桶あるいは曲げ物を埋置したものである。また、南東隅で検出した2基（1003・1003a号井戸跡）は井戸底まで完掘していないが、構造的には1054号井戸跡と同一と考えて差し支えあるまい。

1003号井戸　SE－1003　（Fig. 6・23）

調査区の南東隅に位置する素掘りの井戸で、その北側にも素掘りの井戸跡が重複してある。両者の切り合いは定かではなく、仮に1003a号井戸跡とした。井戸跡の大半は調査区外に拡がり、全容は明らかでないが、堀方は直径が250～270cmほどの円形プランをなそうか。壁面は緩やかに立ち上がる。井戸底までの深さは90cmであるが、井側などの痕跡はなく、井戸底に達しているとは考えがたい。また、1003a号井戸跡は、1003号井戸跡より一回り小さいようである。覆土は灰黒色～灰茶褐色砂土で、弥生土器から土師器、須恵器のほか青磁や白磁と平瓦片などが混在して出土した。

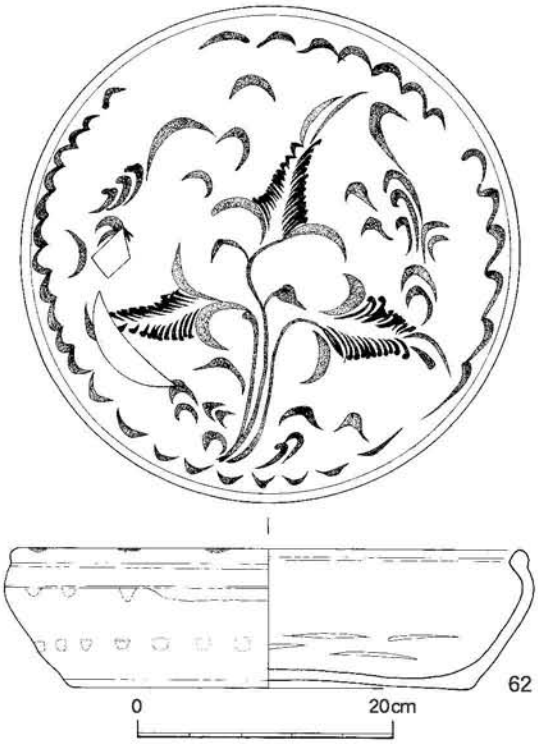

Fig.20　1053号土壙出土遺物実測図（1/6）

出土遺物（Fig. 23・62）

63は破砕した滑石製石鍋を再加工した短冊形の石錘である。長軸は7cm、短軸は4.5cmほどの長方形をなし、厚さは1.3～1.6cmを測る。緩やかに内彎した石鍋の両面を研磨して平坦に仕上げている。また、測縁は縦に削って成形し、短軸に沿って結縛用の浅い溝を刻んでいる。

1054号井戸　SE－1054　（Fig. 21・22）

調査区のほぼ中央に位置する素掘りの井戸跡で、すぐ北には1025号土壙がある。南東壁は撹乱を受けて消失しているが、堀方は短辺が350cm、長辺は390cmほどの円形プランをなす。井戸は初めに検出面より130cmほど掘り込み、更にその中央に直径が145cmほどの井側を埋置した堀方を70cmほど掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。緩やかに立ち上がる壁面は擂り鉢状に窄まり、凹レンズ状に浅く窪んだ井戸底には、有機物の腐食痕が断片的に遺存していた。厚さは7～9mmほどで、直径が65～75cmの楕円形プランに復原される。その厚さから桶を井側として埋置したことが想起される。覆土は暗灰黒色～灰茶褐色砂土で、下層ほど砂質が濃くなる。遺物はきわめて雑多で、須恵器や土師器、瓦器、陶器、青磁、白磁片のほかに滑石片やフイゴ片などが出土している。

出土遺物（Fig. 23・62）

64は高台径が7cmの白磁壷である。高台は露胎。緻密な灰白色の胎土に灰青緑色の半透明釉をかけている。65は青白磁の合子身で、口径は4.5cm、底径は4cm、器高は2.2cm。口縁部は内傾気味に直口し、体部の中位から見込には青白色釉を施釉している。

3） その他の遺構 （ＳＰ）

調査区からは多数の柱穴が検出された。これらの柱穴の中には底に扁平な自然石や礫石を敷いた明らかに建物の礎石と考えられるものがある。殊に遺構面が比較的よく残っている調査区の南側では、柱間スパーンが梁行1.7～2.6m、桁行が1.7～2.0mに復原可能な一群があり、ひとつの建物遺構を構成していた可能性があるが、削平が著しく即断はできなかった。また、これらの柱穴の覆土はほぼ同じで同時期と考えられ、遺物も弥生土器から須恵器、土師器、青磁碗等が出土している。

1011号ピット　SP－1011 （Fig. 6・26）

調査区中央部の北壁寄りに位置する柱穴である。平面形は45～60cmの楕円形プランを呈し、底面には20～25cmの扁平な角礫を水平に敷いている。柱芯の礎石とした可能性が考えられる。すぐ北には底面に円礫を敷いた同機能の柱穴1012号ピットがある。南へ1.8mの距離には礫石を敷いた柱穴が、また東へ1.8mにある1008号ピットは礫石を埋置しないが覆土は同じで、一括して建物を構成していた可能性が想起される。覆土は灰黒色土で、白磁碗片と鉄滓が出土している。

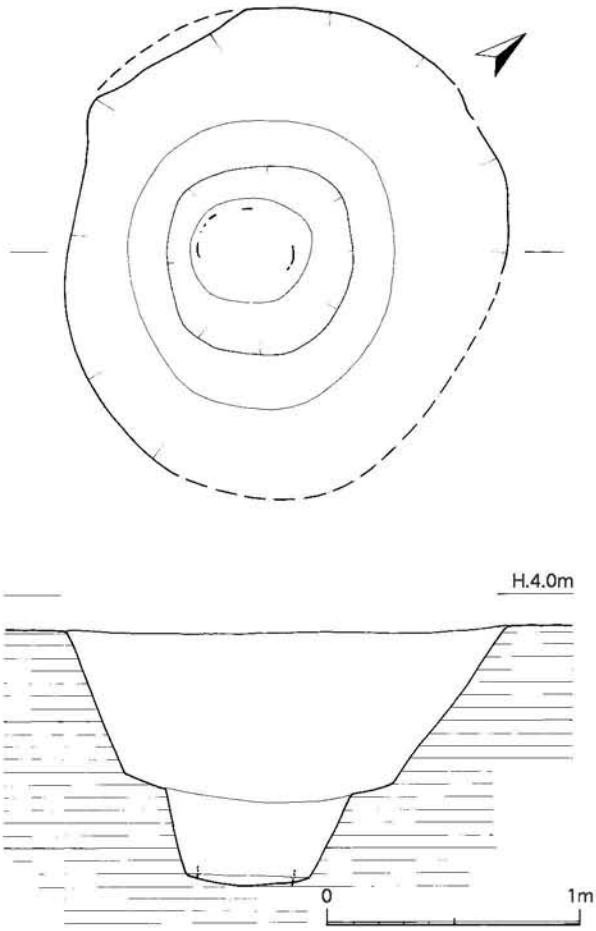

Fig.21　1054号井戸跡実測図（1/30）

Fig.22　1054号井戸跡（東より）

1012号ピット　SP－1012

（Fig. 6・26）

調査区の中央部北壁寄りにある小振りの柱穴で、1011号ピットと並置している。平面形は直径が30cmの円形をなし、底には20～25cmの扁平な円礫を敷いている。覆土は灰黒色土で、土師器小片が出土した。

1013号ピット　SP－1013

（Fig. 24・25）

調査区の南東隅にある長辺が80cm、短辺が50cmの楕円形プランの柱穴で、西壁は1014号ピットによって削平されている。深さは約25cmで、底面には35～42cm、厚さが15cmの大きめの花崗岩転石が水平に埋置されている。覆土は灰黒色砂土で、土師器甕や須恵器甕、白磁碗片などが少量出土している。1011号ピットを西桁行の北隅柱と仮定すると柱間1.8mの東桁行の北隅柱から4.8mの距離にあり、これを一棟とすると梁間1.8m、桁行1.6mの1間×3間の建物に復原することが可能である。

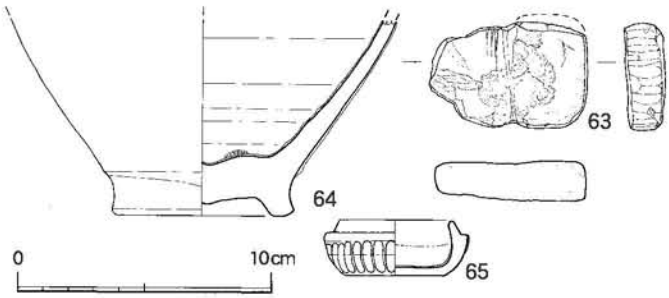

Fig.23　1003・1054号井戸跡出土遺物実測図（1/3）

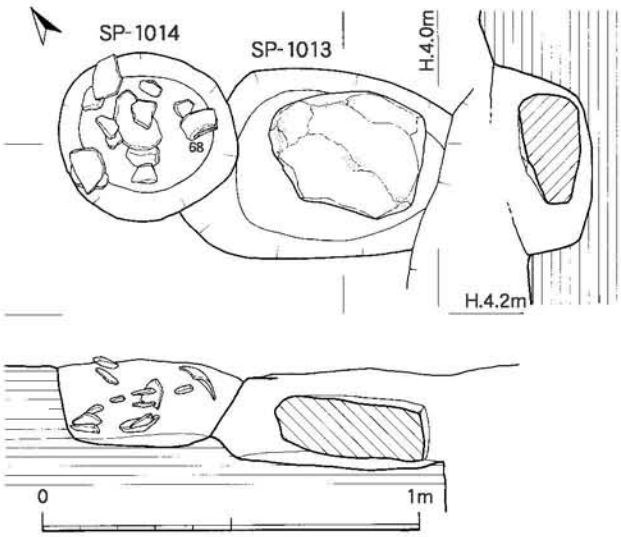

Fig.24　1013・1014号ピット実測図（1/20）

Fig.25　1013・1014号ピット（西より）

1014号ピット　SP－1014

(Fig. 24・25)

調査区の南東隅にある柱穴で、南壁は1013号ピットの北壁を切っている。平面形は、直径が45cmの円形プランを呈する。深さは23cmで、断面形は逆台形をな

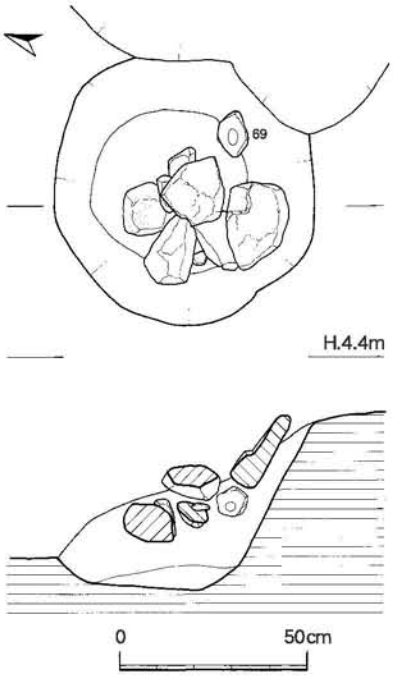

Fig.27　1034号ピット実測図（1/20）

Fig.26　1011・1012号ピット基礎石断面（東より）

Fig.28　1034号ピット（西より）

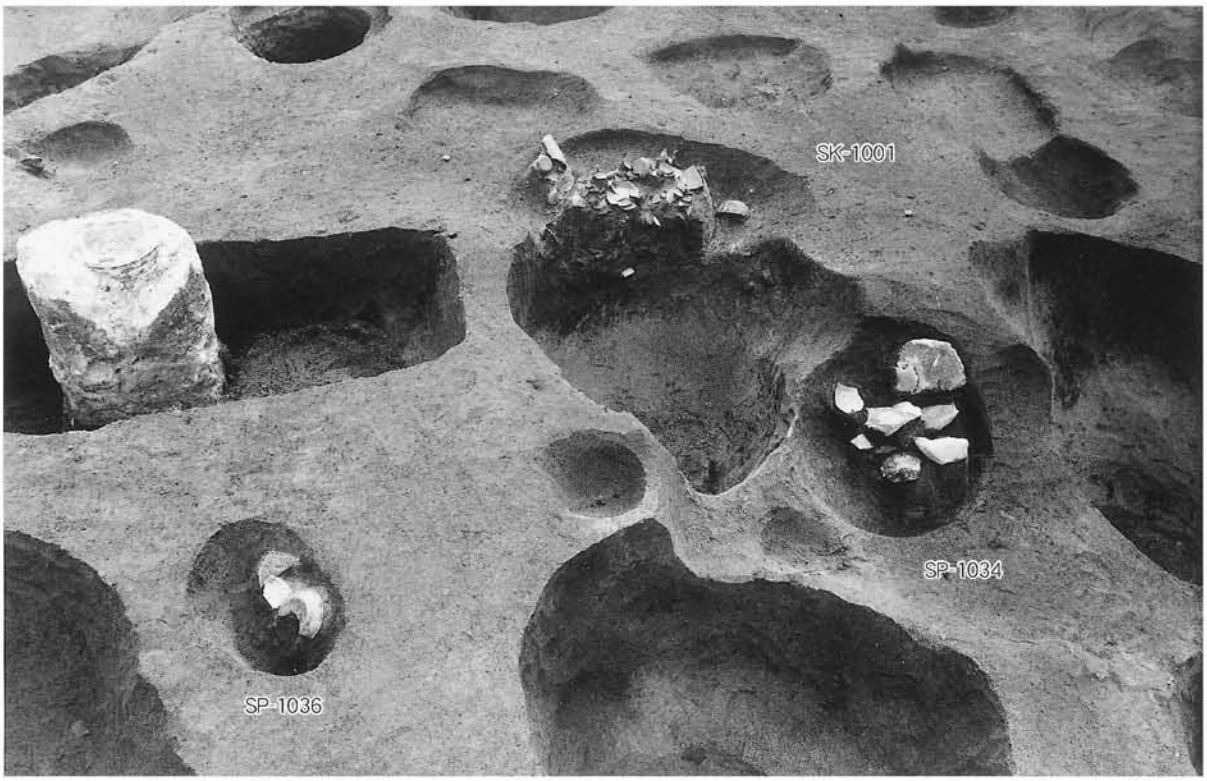

Fig.29　1001号土壙・1034・1036号ピット（西より）

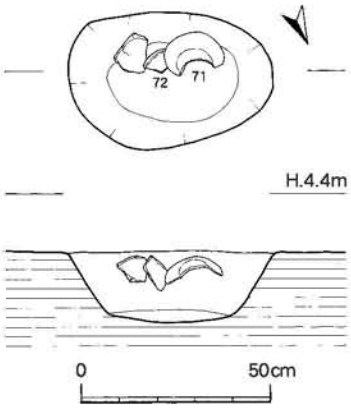

Fig.30　1036号ピット実測図(1/20)

Fig.31　1036号ピット（北より）

す。覆土は黒色土で、弥生土器甕のほかに須恵器坏や土師器片が出土している。

出土遺物　(Fig. 34・62)

66は口径が23.8cmの二重口縁壷である。口縁部は、短く直口する頸部から小さく「S」字状に外反する。調整は口縁部が細かいハケ目後にヨコナデ、頸部は外面が粗いタテハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は粗く、微細～小砂粒と雲母微細を多く含むほか赤褐色粒をわずかに含む。淡明橙色。67は口径が25～26.5cmのやや歪な甕である。胴部は短い倒卵形をなし、口縁部は「く」字状に外反する。口縁部は細かいヨコハケ目、胴部は外面がタテハケ目、内面はヘラケズリ。胎土はやや粗く石英細～小砂粒と雲母を含む。淡橙色。68は須恵器坏で、口径は19cm、高台径は11.8cm、器高は 5cm。体部はストレートに外反する。胎土は良質で、色調は灰色。

1034号ピット　SP－1034　(Fig. 27)

調査区中央部の西壁寄りに位置し、北東へ２mの距離には1036号ピットが、またすぐ南東には1001号土壙がある。平面形は直径が70～75cmの円形プランをなす。緩やかに立ち上がる壁面は深さが50cmで、南西壁に沿って15～25cmの被熱した礫石が敷かれており、礎石の可能性が濃い。覆土は濃灰黒色土の単一層で、土師器甕や小皿のほかに須恵器片、瓦器椀片、青磁碗片、平瓦片が出土している。

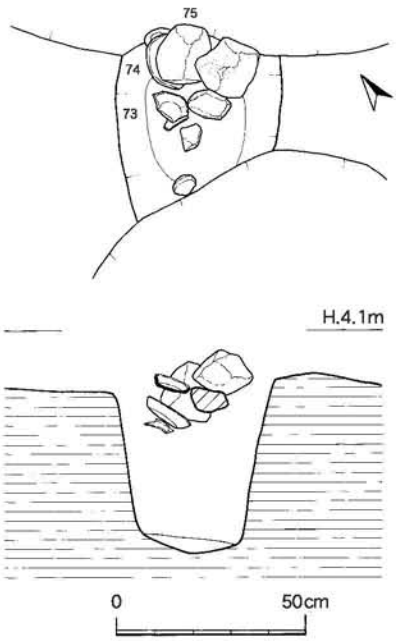

Fig.32　1052号ピット実測図（1/20）

Fig.33　1052号ピット（東より）

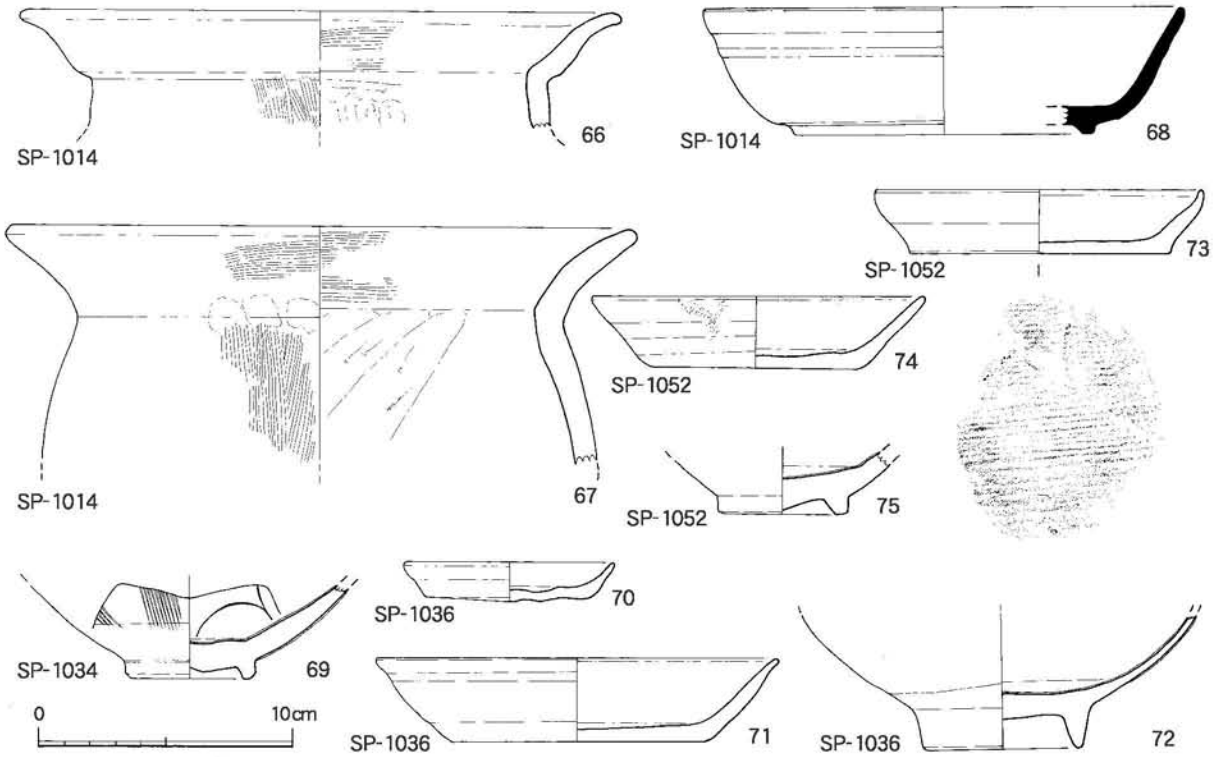

Fig.34　ピット出土遺物実測図（1/3）

出土遺物　(Fig. 34)

69は高台径が５cmの同安窯系Ⅱ類の青磁碗である。体部には櫛描き文を放射状に刻んでいる。胎土は精良な赤茶色で、淡いオリーブ色の釉薬を施釉している。

1036号ピット　SP－1036　(Fig. 29～31)

調査区の中央部西寄りにあるピットで、平面形は37～65cmの楕円形プランを呈する。緩やかに立ち上がる壁面は、深さは20cmで、断面形は逆台形をなす。南東へ2.6mの距離には、南西方の1034号ピットから直交する柱穴があり、１棟の建物を構成していた可能性が否定できない。覆土は灰黒色土の単一層で、白磁碗や土師器坏、小皿、瓦器碗片、平瓦片等が出土している。

出土遺物　(Fig. 34)

70は口径が8.4cm、底径が6.6cm、器高が1.4cmの土師器小皿。短い口縁部はわずかに内彎する。底部は波状に凹んでいる。71は土師器坏で、口径が16cm、底径が10cm、器高は3.3cm。ストレートに外反する口縁部は端部を細く摘み出す。全体に油煙痕があり、灯明皿に転用したものか。調整はいずれも体部がヨコナデ、内底面は押圧ナデ、外底面は糸切り後に板目圧痕。胎土には細砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色。72は高台径が６.２cmのＶ類の白磁碗である。畳付は高く、体部は内彎して立ち上がる。灰白色の胎土に青みのある半透明の白色釉を高台まで施釉している。

1052号ピット　SP－1052　(Fig. 29～31)

調査区の南西部、1002号土壙のすぐ南にあり、東西壁は攪乱を受けて消失している。平面形は短辺が45cmで、長辺は80cmほどの楕円形プランをなそうか。急峻に立ち上がる壁面は、深さが45cmで、箱形の断面形をなす。検出面上には15cm大の角礫があり、礎石と考えたが形状的には小土壙の可能性も否定できない。覆土は濃灰黒色土の単一層で、白磁碗のほかに土師器坏、須恵器坏片、瓦器碗片、緑釉壷片がわずかに出土した。

出土遺物　(Fig. 34・62)

73・74は土師器坏である。73は口径が13cm、底径は10.2cm、器高は2.5cm。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直口する。体部はヨコナデ、内底面は押圧ナデ、外底面はヘラ後に板目圧痕。74は口径が13.6cm、底径8.2cm、器高は 3 cm。体部はストレートに外反する。底部はヘラ切り。いずれも胎土は良質で、淡黄橙色。75は高台径が 5 . 1 cmを測るⅡ－ 2 類の白磁碗である。胎土は緻密な灰色で、淡青色釉を施釉している。雑な兜巾状の高台は露胎である。

Fig.35　第 2 面遺構配置図（1/100）

4．第２面の調査

第２面は、第１面の遺構を検出した第Ｉ層を20～30cm掘り下げた標高3.9～4.0ｍで検出した遺構面である。この第Ｉ層はレヴェル的には、第１面の遺構面と大差がないところがあり、幾分かの矛盾が生じている。本調査区は、古砂丘の頂部にむかう西側が高く、石堂川に面する東側は竪粕遺跡へと続く鞍部にあたり堆積層は厚くなる。このレヴェル的な齟齬は、地形的な特徴を加味せずに画一的に調査した稚拙さと観察不足に大きく起因するものである。

検出した遺構は、竪穴住居跡２棟と土壙13基＋αのほかに柱穴を検出した。土壙は、方形～長方形プランと円～楕円形プランのものがある。このうち長方形プランのものの中には、形状的に墓壙を想起させるものもあるが、積極的な根拠には乏しい。柱穴は第１面で検出したような底面に転石を敷いて礎石としたようなものはなく、建物跡の柱筋としてのまとまりを示すものも把握できなかった。また、時期的には竪穴住居跡と土壙の間には長い時間的空白がある。これは古砂丘面上の第Ｉ層に掘り込まれた遺構面の検出にあたって均一に掘り下げて細心さを欠いたことに因るものである。

１） 竪穴住居跡 （ＳＣ）

竪穴住居跡は、調査区の西側で重なり合った２棟を検出した。規模的には3.7ｍ～５ｍの中規模なものと2.5ｍ～３ｍの小規模のものがある。このうち小規模な住居跡は明確な主柱穴を検出できず、若干の不確かさが危惧される。いずれも竈は付設していない。また、この２棟のほかにもプラン的に住居跡の可能性を想起させるものがあるが、積極的根拠が乏しいために土壙として取り扱った。

2005号住居跡　SC－2005　(Fig. 37～39)

2005号住居跡は、調査区の西壁に沿って位置している。東壁は、2006号住居跡の北西隅壁を切り、また、北東隅壁は2009号土壙によって削平されている。いずれの隅壁もピットや撹乱による削平を受けているが、平面形は、南北長が4.5～4.9ｍ、東西長が3.7ｍの長方形プランを呈する。壁面は、やや

Fig.36　第２面全景（北より）

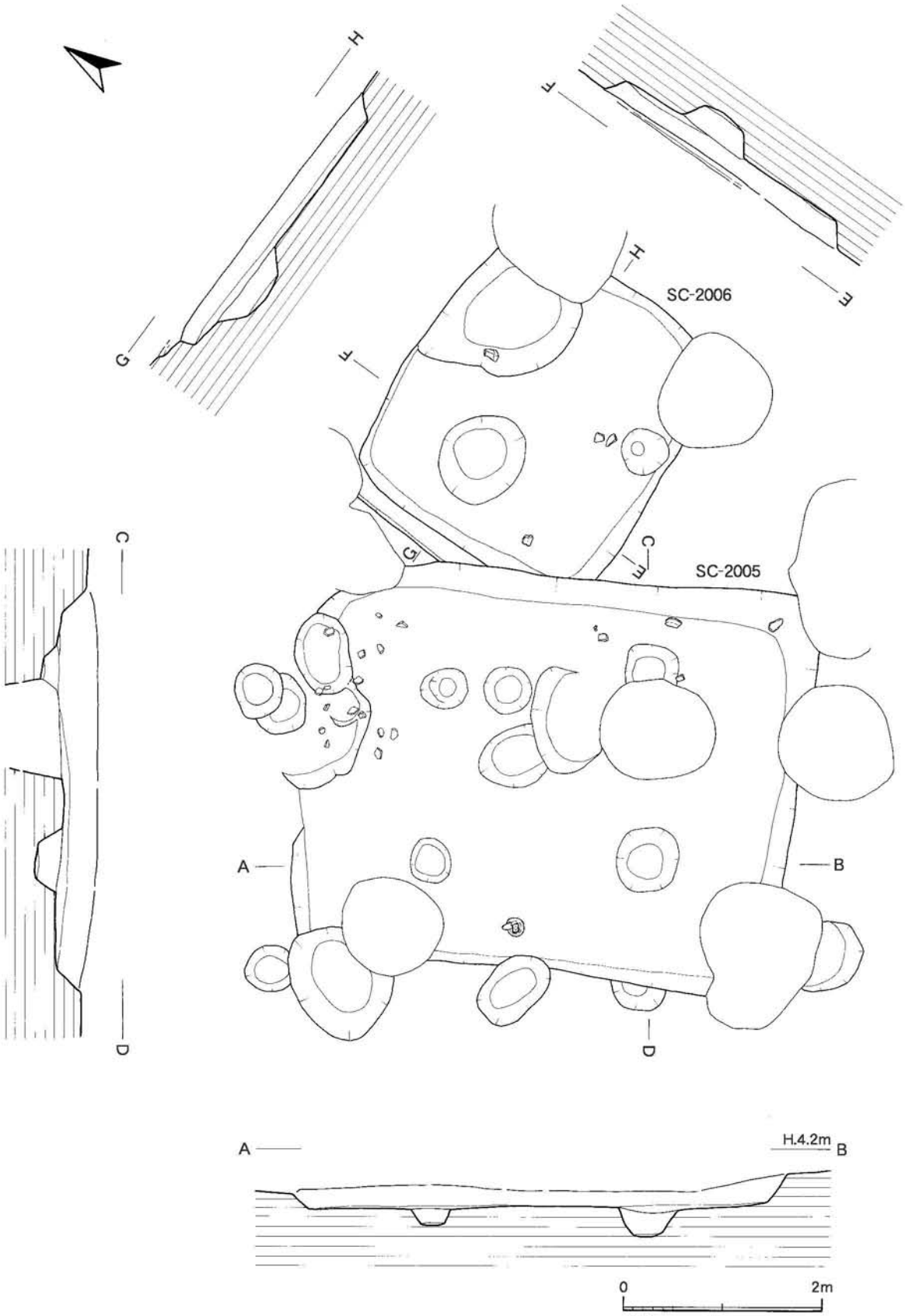

Fig.37　2005・2006号住居跡実測図（1/60）

急峻に立ち上がり、壁高は22～38cmを測る。床面は、壁際から中心に向かって緩やかに傾斜している。断面形は、中央部が凹レンズ状に浅く窪んだ逆台形を呈する。主柱穴は、壁面から30～65cmほど内側に掘り込んだ直径が30～55cm、深さが15～29cmの比較的しっかりした4本柱（P1～P4）である。柱間は、東西長が1.6～1.8m、南北長が1.9～2.0mを測る。また、竈はなく、被熱による床面の赤変も見られなかった。遺物は、壁際の床面上から土師器高坏や甕片、須恵器坏、甕片等が出土した。覆土は、明茶褐色砂の単一層である。

出土遺物（Fig. 41・62）

76は、口径が12.4～13cm、脚径10.1cm、器高が9.3cmの土師器高坏である。調整は脚部外面が研磨状のケズリ、内面が押圧ナデのほかは丁寧なナデ。胎土は良質で、雲母微細粒のほか少量の微細砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調は明赤褐色。77は、口径が13.4～13.8cmの須恵器坏。口縁部は、偏球形の体部から直口して立ち上がる。胎土は精緻で、雲母微細と微細砂をわずかに含む。焼成は堅緻。色調は淡赤茶色。

2006号住居跡　SC－2006
（Fig. 37・38・40）

2006号住居跡は、調査区のほぼ中央部にある小型の住居跡で、北西隅壁は2005号住居跡によって切られている。また、南壁側の両隅壁は、2023号土壙や

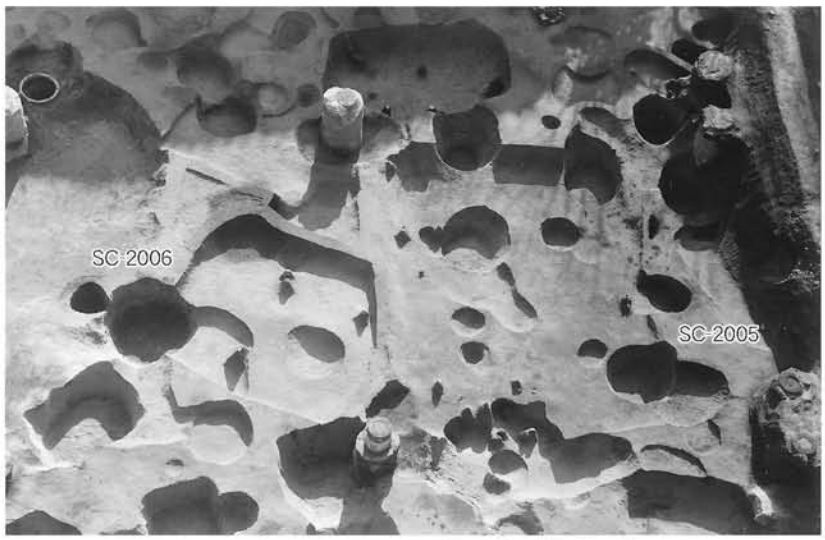

Fig.38　2005・2006号住居跡（北より）

Fig.39　2005号住居跡（北より）

Fig.40　2006号住居跡（北より）

撹乱壙の削平を受けている。平面形は、東西長が2.5m、南北長が2.9mの方形プランを呈しているが、北壁には壁に沿って、幅が15～20cm、高さが5～8cmのフラット面が付いており、ベッド状の有段面を付設していたものと考えられる。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は30～35cmを測る。床面は、フラットで中央部がわずかに凹レンズ状をなしている。断面形は逆台形を呈している。南壁際で径が45cm、深さが17cmのピットと北壁に沿って径が75～95cm、深さが23～26cmの土壙状のピットを検出したが主柱穴は検出できなかった。また、住居跡の四周からも柱穴を想起させるピットは検出できなかった。覆土は、淡明茶褐色砂の単一層で、遺物は、須恵器坏や坏蓋・甕のほか土師器高坏・坏、砥石がわずかに出土した。

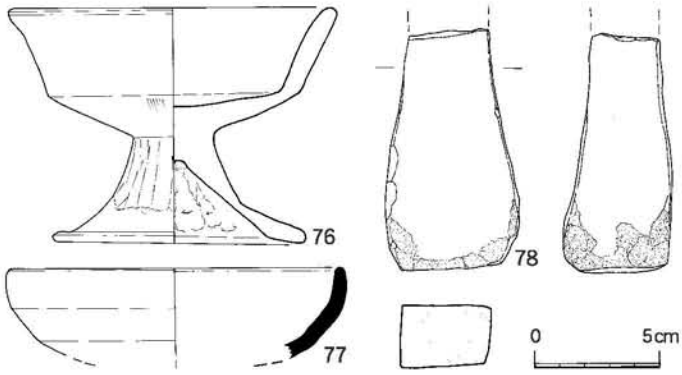

Fig.41　2005・2006号住居跡出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig. 41・62）

78は、砂岩質の砥石である。四周と小口面の5面が、砥面として使用されている。断面形は長方形をなし、上縁にむかって細くなる。

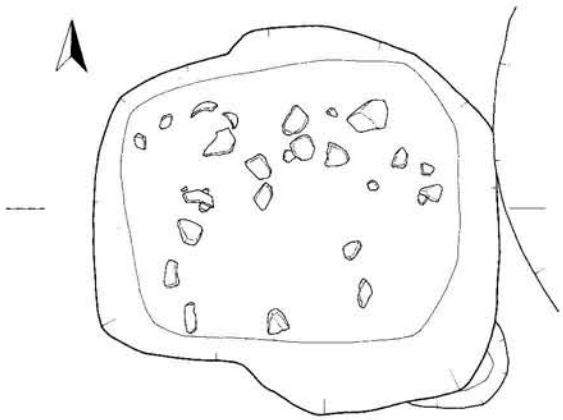

Fig.42　2001号土壙実測図（1/20）

2）土壙（SK）

第2面では17基の土壙を検出した。プラン的には、方形～長方形と円形～楕円形のものとに大別され、規模的には方形～長方形プランの土壙が大きく、円形～楕円形プランの土壙は小さい傾向が窺える。分布的には、古砂丘面の残る範囲に散逸的に拡がっている。また、遺物の出土状況から遺物を破砕して投棄した廃棄土壙やプラン的に観て墓壙を想起させる幾基かを除いてその機能を特定できるものはなかった。

2001号土壙　SK－2001（Fig. 42・43）

調査区南壁際のほぼ中央に位置する東西軸の土壙である。すぐ東には2022号土壙が、南には2002号土壙があり、北西隅壁は浅い方形の土壙を切っている。平面形は、長辺が108cm、短辺が104cmの隅丸方形プランを呈する。深さが38～45cmの壁面はやや急峻に立ち上がる。断面形は、逆台形をなし、壙央は浅く凹レンズ状に窪んでいる。覆

Fig.43　2001号土壙（南より）

土は、上層に明茶褐色砂、下層には暗茶褐色砂が凹レンズ状に堆積していた。遺物は、壙底より10～15cmほど浮いた状態で、須恵器坏や坏蓋・甕のほかに土師器の甕や小皿が散乱して拡がった状態で出土したが、量的には少ない。

2002号土壙

ＳＫ－2002

(Fig. 44・45)

調査区南壁のやや西寄りに位置する小型の土壙で、すぐ北には2001号土壙がある。西壁は、2003号土壙の東壁を切っている。東壁が調査区外に拡がり全容は明らかでないが、平面形は南北長が110cmほどの隅丸の方～長方形プランをなそう。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は55cmを測る。壙底は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み、断面形は緩やかな逆台形をなそう。覆土は、上層が暗茶褐色砂、下層には黒茶褐色砂が凹レンズ状に堆積していたが、遺物は出土しなかった。

2003号土壙

ＳＫ－2003

(Fig. 44・45)

調査区南壁際の西寄

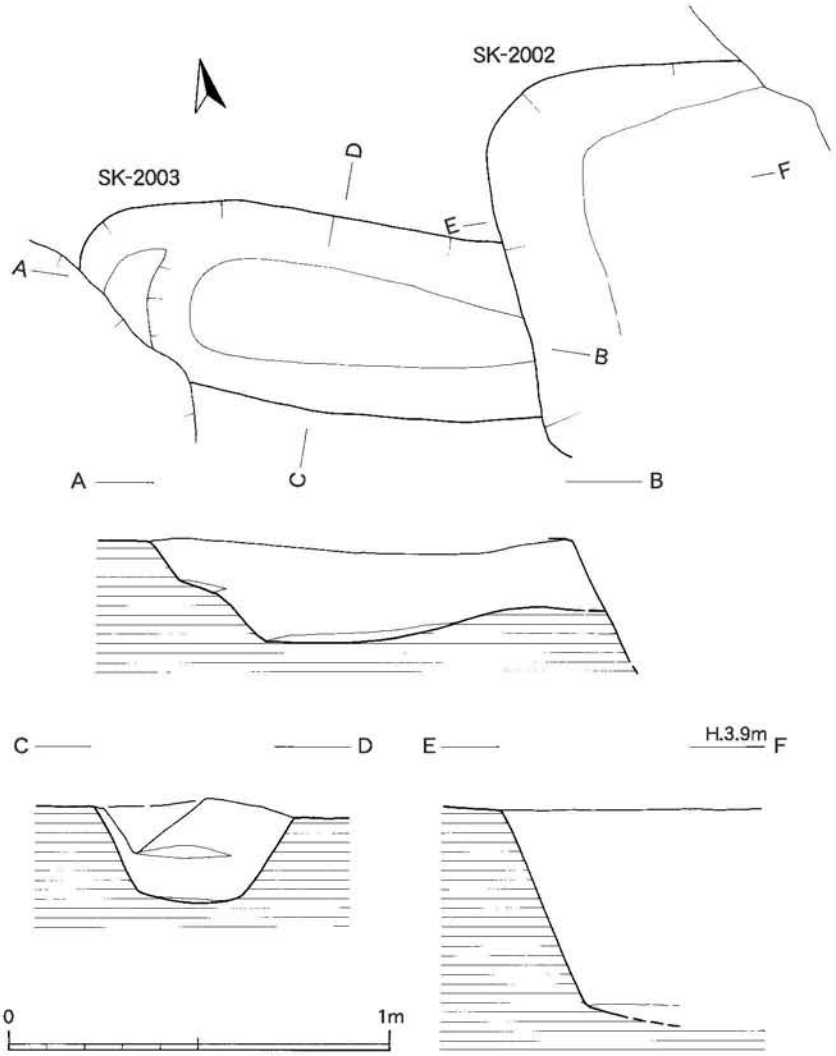

Fig.44　2002・2003号土壙実測図（1/20）

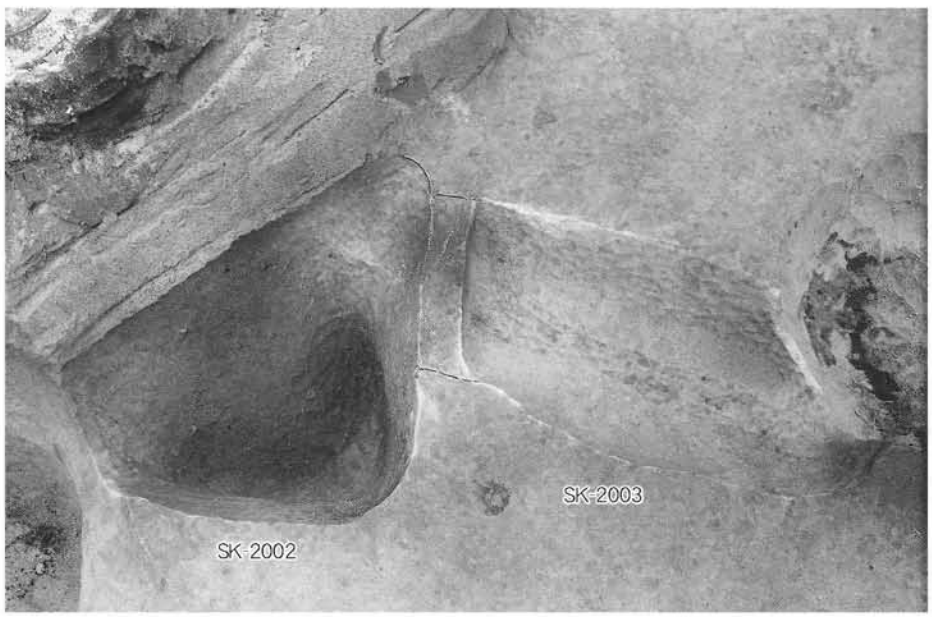

Fig.45　2002・2003号土壙（北より）

りに位置し、北西へ２ｍの距離には2019号土壙がある。西小口壁の南半は撹乱壙に、東小口壁は2002号土壙によって削平されている。平面形は、東西長が約160cm、南北長が50 cmの隅丸長方形プランをなし、主軸方位をN－72°－Wにとる。深さが27cmの壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は壙央が浅く凹レンズ状に窪む。西小口壁には、壙底より12cmの位置に10cmの幅で半月形のフラット面を付設した２段掘りの構造をなしている。壙底は東半がフラットで、西壁にむかって緩やかに窪んでいる。覆土は上層が暗灰茶褐色砂、下層が黒灰色砂で、最下層には灰褐色の祖砂層が薄く堆積していた。小口壁やプラン的形状から墓壙の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

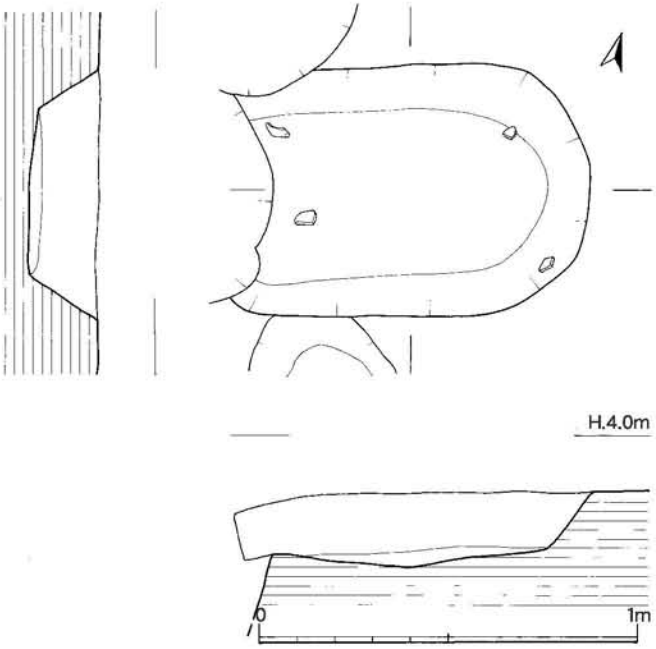

Fig.46　2004号土壙実測図（1/20）

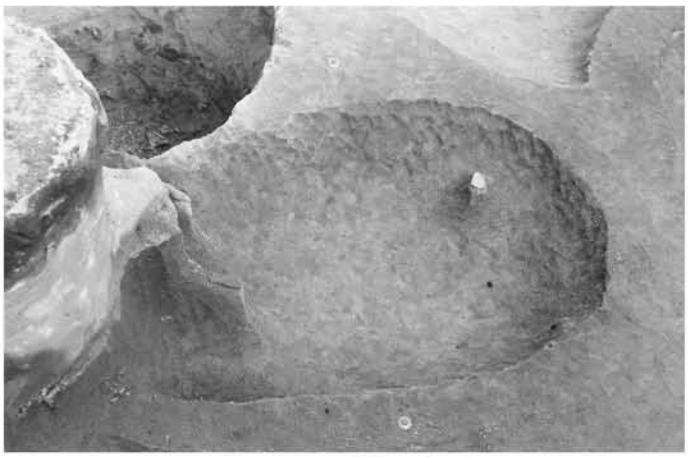
Fig.47　2004号土壙（南より）

2004号土壙　ＳＫ－2004

（Fig. 46・47）

調査区の西壁際の南寄りに位置する東西軸の土壙で、すぐ北には2005号住居跡が、東へ２ｍの距離には2019号土壙がある。平面形は西小口壁が消失しているが、南北長が67cmで、東西長は100～110 cmの隅丸長方形プランになろう。主軸方位はN－77°－E。壁高は20cmで、壁面はやや緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形をなし、壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪んでいる。覆土は暗茶褐色砂の単一層で、不明鉄器片と土師器甕、内黒瓦器碗片がわずかに出土した。プラン的形状や覆土から墓壙の可能性も否定できない。

2008号土壙　ＳＫ－2008　（Fig. 48・49）

調査区の西壁際のほぼ中央に位置する大型の土壙で、南壁は2018号土壙に切られている。西側の大半が調査区外に拡がっているが、平面形は東西長が150cm＋αの隅丸方形～長方形プランをなそう。壁高は10cmを測り、壁面はやや急峻に立ち上がる。床面は中心にむかって緩やかに傾斜し、壙央は浅い、凹レンズ状をなしている。覆土は淡明茶褐色砂の単一層で、弥生甕片が出土した。

2009号土壙　ＳＫ－2009　（Fig. 38・50）

調査区中央部の北西寄りにある南北軸の土壙で、2005号住居跡の北壁と重複している。西壁側の大半が撹乱を受けて消失しており全容は明らかでないが、南北長が75cm、東西長が50cmほどの楕円形プランをなすが、南壁側には主軸方位に直交するような土壙状の遺構が緩やかな段を作って続いている。これが一連の遺構かあるいは切り合う二つの遺構かは現時点では判別できなかった。深さが30cmの壁面は、急峻に立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は茶褐色砂～暗茶褐色砂で、土師器

甕片や内黒瓦器碗が出土した。

2018号土壙　ＳＫ－2018

(Fig. 48・53)

調査区西壁際のほぼ中央部にある小土壙で、北壁は2008号土壙の南壁を切っている。平面形は西壁側が調査区外に拡がるが、一辺が65cmほどの隅丸方形プランになろうか。深さが25cmの壁面は、急峻に立ち上がり、断面形は逆台形。壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪む。覆土は暗茶褐色砂土で、遺物は出土しなかった。

出土遺物（Fig. 53）

79は、底径が6.6cmの弥生甕で、厚い底部は上げ底になる。外面はタテハケ目、内底面は指頭押厚ナデ調整。胎土は粗く、石英小砂粒と雲母微細を多く含み、色調は明赤橙色。

2019号土壙　ＳＫ－2019

(Fig. 51・52)

調査区の南西部に位置する東西軸の大型土壙で、すぐ北には2005号住居跡があり、北壁は近世墓に切られている。平面形は長辺が271cm、短辺が167cmの隅丸長方形プランで、主軸方位はN－47°－E。壁面はやや急峻で、壁高は53cm。壙底は中央部が浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形。覆土は上層が暗茶褐色砂、下層には暗灰茶褐色砂が凹レンズ状に厚く堆積し、最下層には薄い黒配色砂層がある。遺物は、弥生の甕や高坏、須恵器甕、坏、土師器甕、瓦器椀、白磁碗、平瓦等が混在して散逸的に出土している。覆土的には古代初め頃か。

出土遺物（Fig. 53・62）

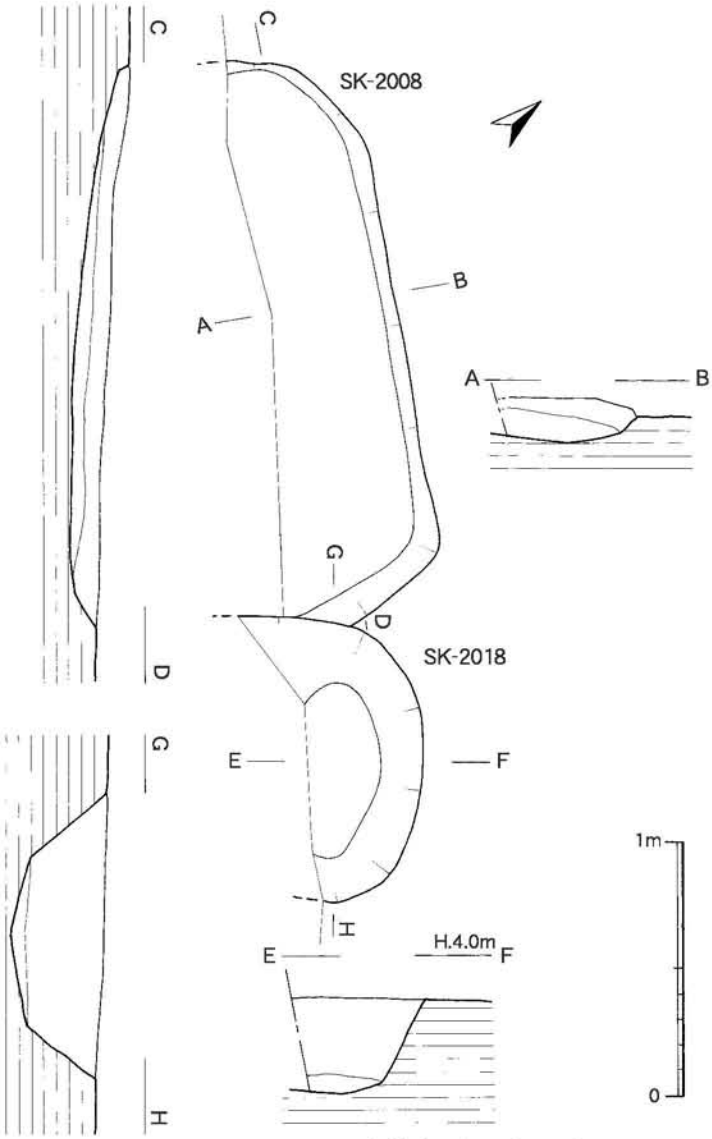

Fig.48　2008・2018号土壙実測図（1/30）

Fig.49　2008号土壙（南より）

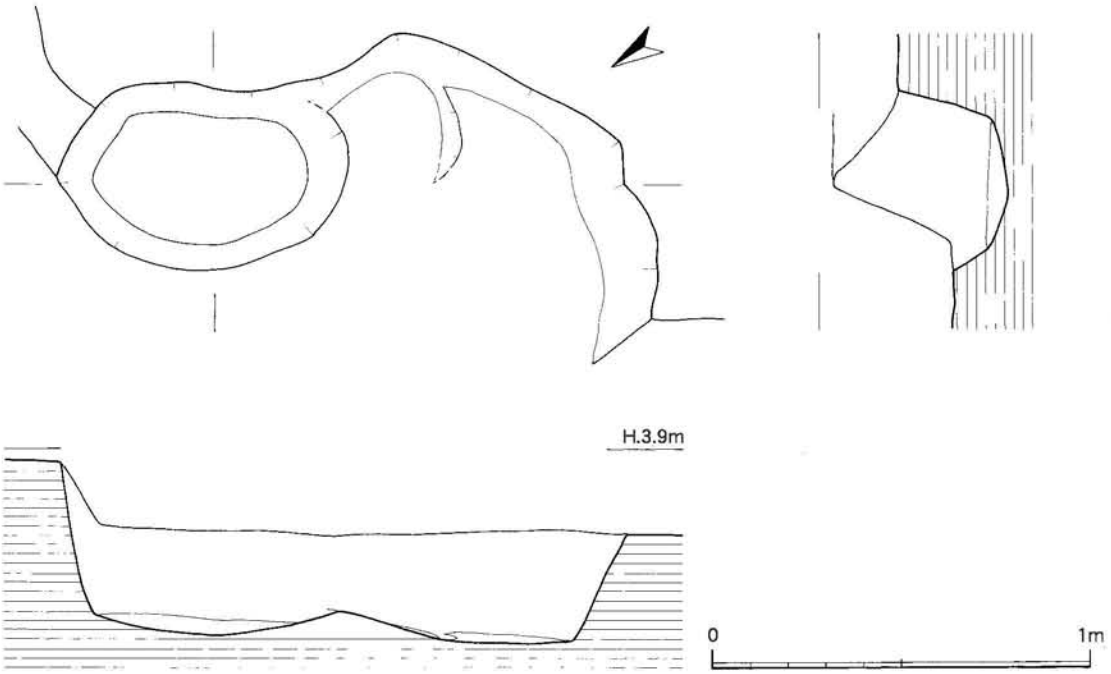

Fig.50　2009号土壙実測図（1/20）

80は、復原径が８cm、厚さが1.2cmの滑石製円盤で、丁寧に研磨して仕上げている。

2024号土壙　ＳＫ－2024（Fig. 54）

調査区の東南部に位置する東西軸の小型土壙で、北には2030号土壙がある。平面形は長辺が106cm、短辺が70cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はほぼ東西を示す。深さが55cmの壁面は急峻に立ち上がる。断面形は逆台形で、壙底は浅い舟底状をなす。覆土は暗茶褐色砂の単一層で、須恵器坏蓋や甕、土師器甕片が出土した。

2025号土壙

ＳＫ－2025（Fig. 35）

調査区中央部の東壁際にある東西軸の小型土壙で、南壁は2026号土壙の北壁を切っている。平面形は東西長が100cm、南北長が75cmの楕円形プランをなす。深さが80cmの壁面は、急峻に立ち上がり、断面形は深い擂り鉢状を呈する。覆土は祖砂粒を含む暗灰茶褐色砂の単一層で、須恵器坏蓋や甕、土師器甕片がわずかに出土している。

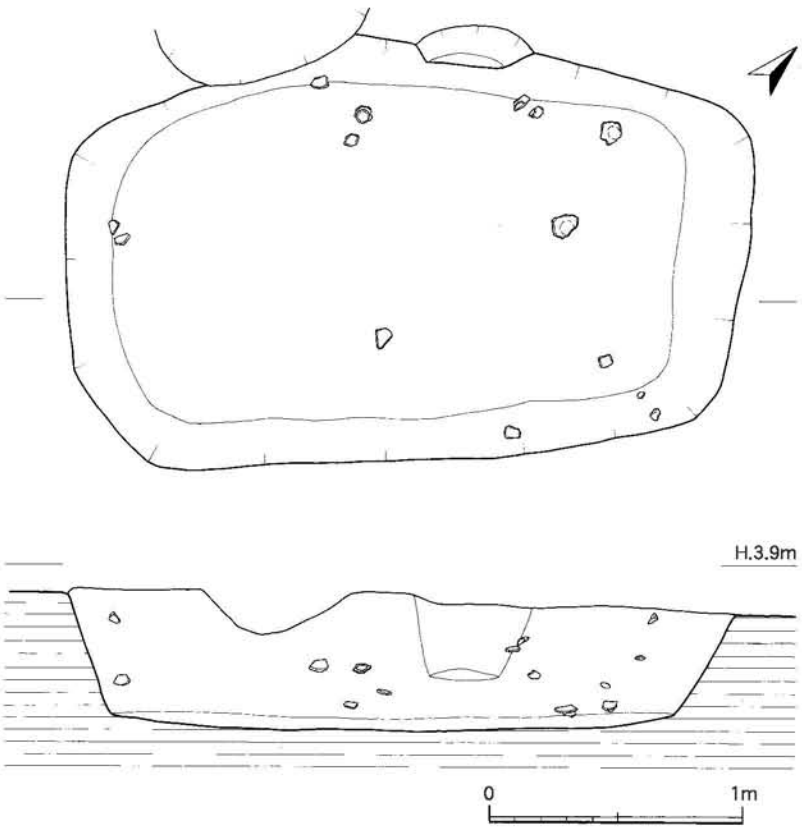

Fig.51　2019号土壙実測図（1/30）

Fig.52　2019号土壙（東より）

2026号土壙　ＳＫ－2026（Fig. 35）

調査区中央部の東壁際にある東西軸の小型土壙で、北壁は2025号土壙によって削平されている。平面形は東西長が90cmで、南北長が70cmほどの楕円形プランをなそう。壁面はやや急峻で、深さは42cmを測る。断面形は逆台形で、壙底は浅い舟底状をなしている。覆土は、淡茶褐色砂の単一層で、遺物は出土しなかった。

2030号土壙　ＳＫ－2030（Fig. 55・56）

調査区の中央部東寄りに位置する南北軸の土壙で、すぐ南には2024号土壙がある。平面形は長辺が168cm、短辺が112cmの隅丸長方形プランで、N－31°－Wに主軸方位をとる。深さが54～60cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。底面はフラットであるが、南壁から北壁側にむかって緩傾斜している。北小口壁際には、やや東に寄って直径が46cm～52cm、深さが20cmのピットがある。覆土は茶～暗茶褐色砂で、明確な差違は認められず、同一遺構と考えられる。遺物は、土師器甕と坏片がわずかに出土したに過ぎない。

3）包含層出土の遺物

第１面と第２面の間には層厚が10～30cmの遺物包含層（第Ｉ層）がある。この包含層には弥生中期の甕のほか須恵器や土師器、輸入陶磁器など弥生時代～古代、中世までの多様な遺物が包蔵されている。第１面上にも近世の包含層もあるが、撹乱が著しく明確には把握できなかった。また、調査区内は近世墓や近現代の撹乱に因って遺物包含層の消失が著しく、撹乱壙からは第Ｉ層と同期同種の遺物が多数出土した。ここでは便宜的に本来の遺物包含層（整地層）出土遺物を第Ｉ層、第１面の遺構検出時や撹乱壙から出土した遺物を包含層の遺物とした。

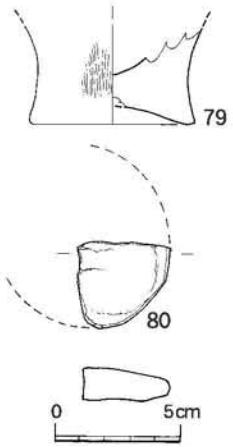

Fig.53　2018・2019号土壙出土遺物実測図（1/3）

第Ⅰ層の遺物　(Fig. 57)

81は、口径が13cmの土師器高坏の坏。口縁部は緩やかに外反する。調整は、研磨状の丁寧なナデ。胎土は精良で焼成は良好。淡褐色。82は、口径が12.4cm、底径が7cm、器高が4.2cmの土師器坏。体部はヨコナデ、底部は内面が押圧ナデ、外底面には板目痕が残る。胎土は良質で多くの雲母微細のほか微細砂粒をわずかに含む。明赤橙色。83・84は、須恵器坏蓋。83は、口径が12.4cm。天井部はフラットで、口縁部はシャープに下方へ摘み出す。内面がナデ、天井部はヘラケズリ。胎土は精良で堅緻。濃灰～灰黒色。84は、口径16.2cm、器高は3cm。天井部には径が2.6cm、厚さが5mmのボタン状の摘みが付く。体部は緩やかな偏球形をなし、口縁部は短く下方に摘み出している。体部はヨコナデ、天井部内面はナデ、外面はヘラケズリで「一」印のヘラ記号がある。胎土は良質で焼成は堅緻。くすんだ灰色。85は、口径が11cm、器高が3.5cmの須恵器坏。口縁部は短く直口し、偏球形の体部には「×」印のヘラ記号がある。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。胎土には微細～小砂粒と微量の雲母微細を含む。焼成は堅緻。淡黒灰色。86は口径が13.4cm、底径10.4cm、器高3.1cmの須恵器坏。体部はストレートに外反する。体部はヨコナデ、底部はナデ。良質の胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含み堅緻。灰～濃灰色。87は、口径23cm、器高が2.6cmの須恵器皿。口縁部は外方へ短く水平に摘み出す。調整は体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面は左回りのヘラケズリ。胎土は良質で焼成は堅緻。灰白色。

包含層の遺物　(Fig. 58～61・63)

88は、弥生の甕で口径は25.6cm。逆L字状の口縁部は短く外反し、内唇はシャープに摘み出し、胴部は短い倒卵形。外面は粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ。胎土はやや粗く、石英砂粒と雲母微細粒を多く含む。外面が明赤橙色、内面は明橙色。

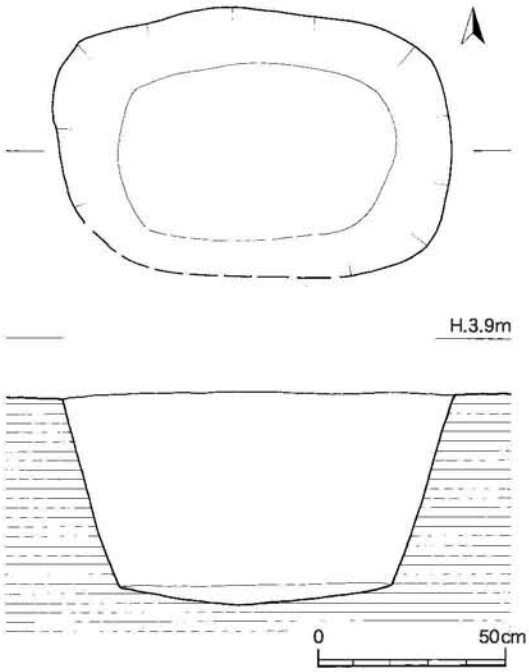

Fig.54　2024号土壙実測図（1/20）

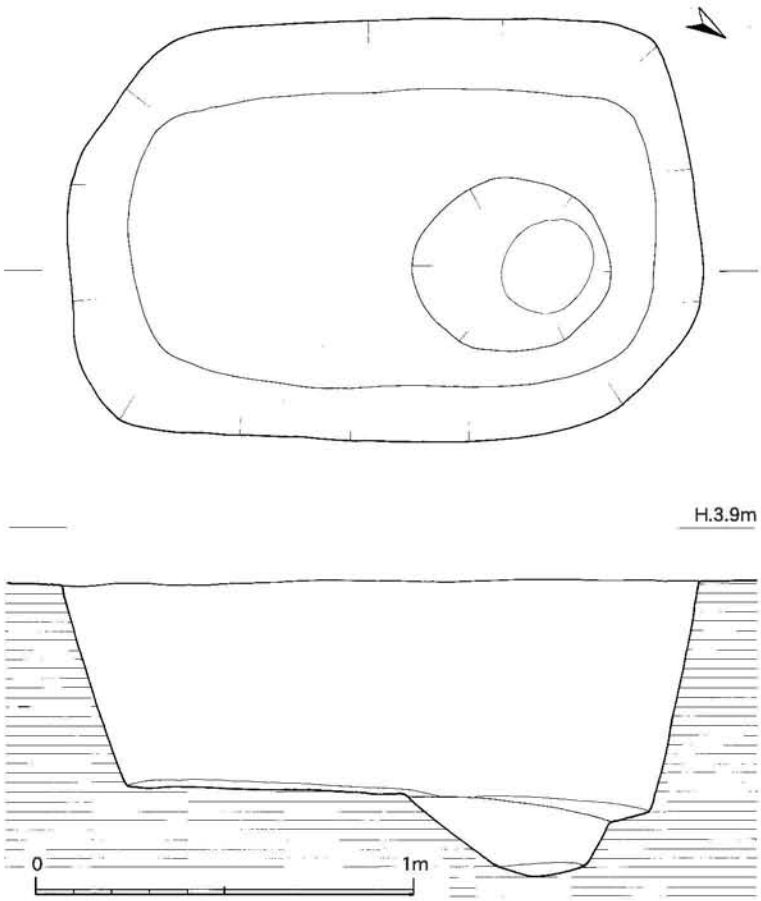

Fig.55　2030号土壙実測図（1/20）

Fig.56　2030号土壙（南より）

89・90は白磁碗。89は口径が12.6cmのⅣ－ 3類碗。器高は3.4cm。90はⅨ類の白磁碗で口径14.8cm、器高は4.6cm。高台は無釉で見込は蛇目釉剥ぎ。89は釉剥ぎ痕に重焼きの目砂痕がある。91～95は青磁碗。91は高台径が 5 cm。外面は放射状に、内面は弧状に櫛描きで施文。淡灰黄色釉を施釉。高台は無釉でⅢ類。92は兜巾高台で外面に櫛、見込にヘラと櫛描きで施文。透明な黄緑色釉を施釉し、高台は無釉。93は高台径が 5.6 cmの龍泉窯系Ⅱ類。濃茶のオリーブ色釉を施釉した体部にはヘラ切りの連弁を配し、露胎の高台内には墨書がある。94は口径が17cmの龍泉窯系Ⅰ類。見込は櫛描きで 6 分し、雲文を描く。95は高台径が 6 cmの龍泉窯系Ⅰ類。圏線が巡る見込に「金玉満堂」を刻す。畳付～高台内は露胎。96は口径が10.1cm、底径3.9cm、器高が2.7cmの白磁皿。見込に花文を描く。灰青色の釉薬を施釉。底面には目跡が付着。Ⅶ－ 2 類。97～99は青磁皿。97は口径が11.2cm、底径 5 cm、器高が1.9cmの同安窯系Ⅰ類。青緑色釉を施釉。98は同安窯系Ⅱ－C類の平底皿で口径11.6cm、器高は2.2cm。見込に櫛描き文を配する。淡いオリーブ色の釉薬を施釉。99は口径が9.9cmの龍泉窯系Ⅰ－ 1 類皿。13世紀前半。100は青白磁合子蓋。口径は 5cm。天井部に型押しの菊文、体部には菊弁を施文。淡青色で口縁部は釉剥ぎ。内面

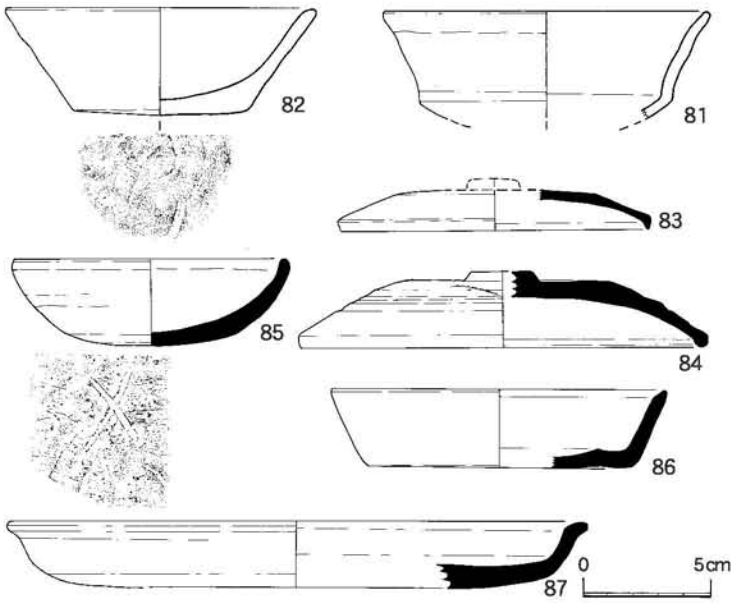

Fig.57　第Ⅰ層出土遺物実測図（1/3）

は天井部のみ施釉。17世紀後半～18世紀前半。101は口径が4.8cmの肥前磁器紅皿。型押成形の体部には線刻文があり、内面に灰白色釉を施釉。17世紀後半～18世紀前半。102は輪花状口縁の肥前磁器小皿。口径は6.4cm。口縁～見込は灰白色釉を施釉。17世紀後半～18世紀前半。103・104は青白磁の合子身。口径は4.6cm。105は匙口の天目碗。体部は薄い黒色釉、口縁は茶色の化粧釉を施釉。高台内に「氷川」の墨書がある。

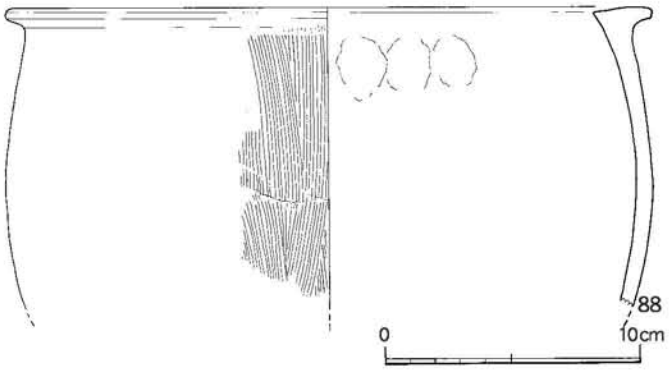

Fig.58　包含層出土遺物実測図１（1/3）

106と107は黒釉の納骨器のセットで高台は露胎。19世紀。108は型押成形の染付磁器小瓶。器高が 4cmの体部には「馬人平安散」と「利済堂製」を染付する。18～19世紀前葉。109～114は土鈴。身幅が3.9～4.1cm（109～112）と5.8cmの（113・114）の 2タイプある。115～117は手捏ねの土錘。115は長さが3.4cm。116・117は長さが5.4～5.7cm。118は滑石製円盤。119は滑石製のミニチュア容器で底部に孔径10mmの円孔がある。120～135は土師器小皿。口径は6.6～ 7cm（120～124）と7.6～9.2cm（125～135）。底径は4.4～7.2cmで小口径のものは 5 cm未満。底部は糸切り。132は口縁に油煙痕があり、灯明皿に転用。137～143は土師器坏。143が口径16cm、底径11.8cmと大きく、137～142は口径12～13.2cm、底径7.6～ 9 cmと小さい。底部は136・137・139～141が糸切り、138・142・143は糸切り後に板目圧痕。144・145は土師器皿。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ。口径は144が14.6cm。145が15.6cm。145の見込に油煙痕があり、灯明皿に転用か。146は脚径が14.8cmの須恵器高坏。脚裾はラッパ状に開く。148・149は須恵器坏蓋。口径は148が15.2cm、149が20.8cm。天井部は左回りのヘラケズリ。149・150は須恵器坏。149は口径14.8cm、器高4.5cm。150は口径14.4cmで外底面には板目圧痕が残る。151は底径が3.4cmの須恵器小壷。頸部は倒卵形の胴部から直口する。底部は糸切り。152～155は軒平瓦。153は中心飾りの退化した均等唐草文。154は内区に宝珠状の中心飾りを、155は 8 弁の花文飾りをもち左右に均等な唐草文を配す。156～161は軒丸瓦。157～161は三つ巴文と珠文を配す。158は巴が右回りに、157・158～161は左回りに尾を引く。

5．小　結

第167次調査では、古墳時代後期から中世前半までの遺構を検出した。調査成果については準備不足に時間的制約が重なり十分に検討できなかった。ここでは簡単に整理し、今後の課題としたい。本調査では、２面の遺構面を検出した。時期的には第１面が11世紀後半から13世紀。第２面は古墳時代後期から古代初めの年代観が与えられる。近世墓は19世紀中葉である。このうち第１面は年代幅が大きく違和感を禁じえない。これは遺構面が安定した整地層の拡がりとして把握できなかったことに因る。状況的には11世紀後半～12世紀の古代末と12世紀末から13世紀代の中世前半に大別できよう。同様に第２面も年代幅があるが、これは第１面と異なり新出の遺構が第Ⅰ層の包含層中で検出できなかったことに起因する。遺構の拡がりは２面とも西方の祇園町界隈に比べて古砂丘の鞍部に占地する立地的制約から密度的にはやや希薄な在り方を示す。また、すぐ西で調査された第109次調査では円筒埴輪を伴う前方後円墳（博多２号墳）などが検出されているが、それに連なる遺構や遺物は検出されなかった。遺物的には弥生中期後葉のものがあり、周辺域の遺構の拡がりを加味して時間的空間的な拡がりを再検討する必要があろう。

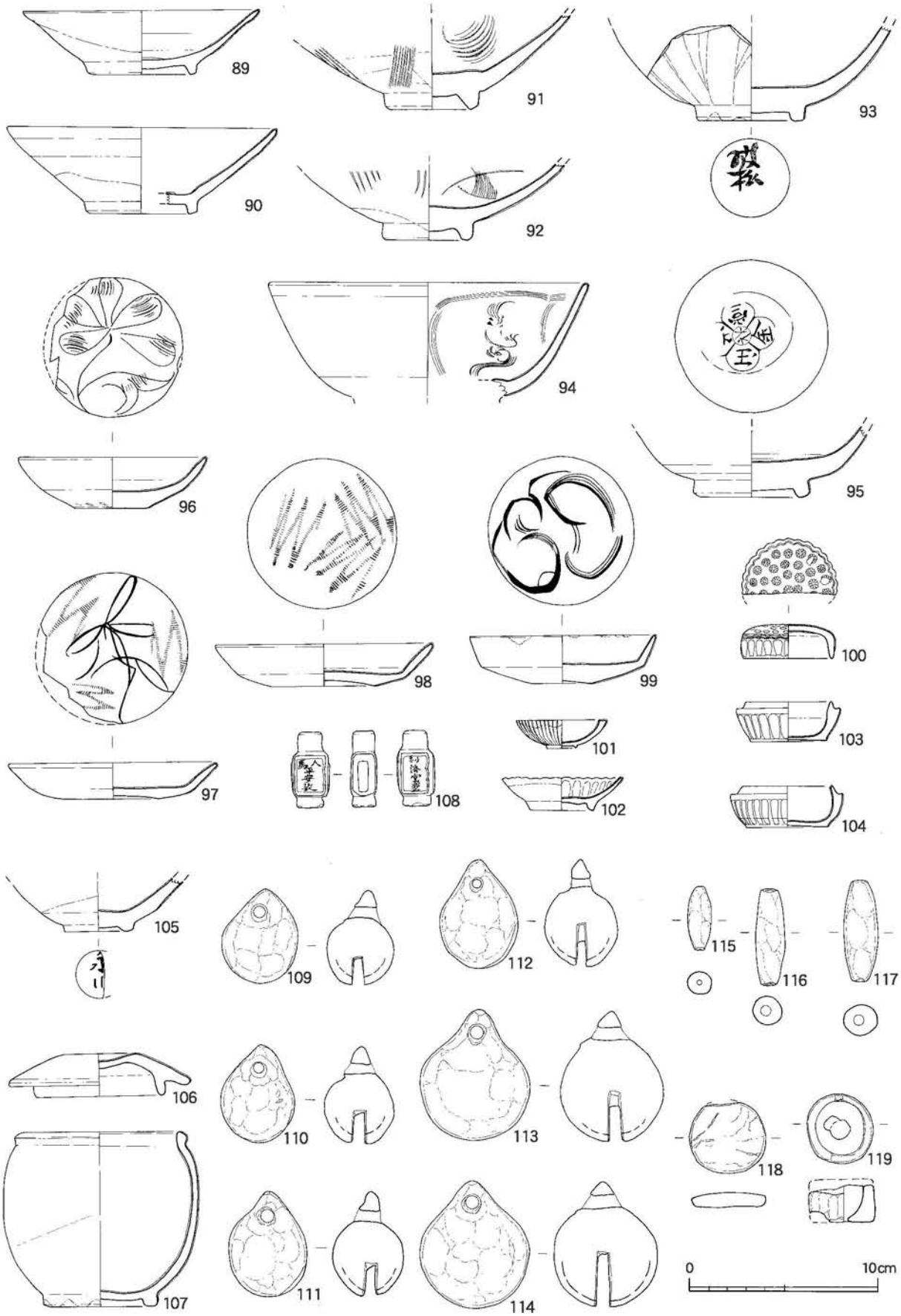

Fig.59　包含層出土遺物実測図２（1/3）

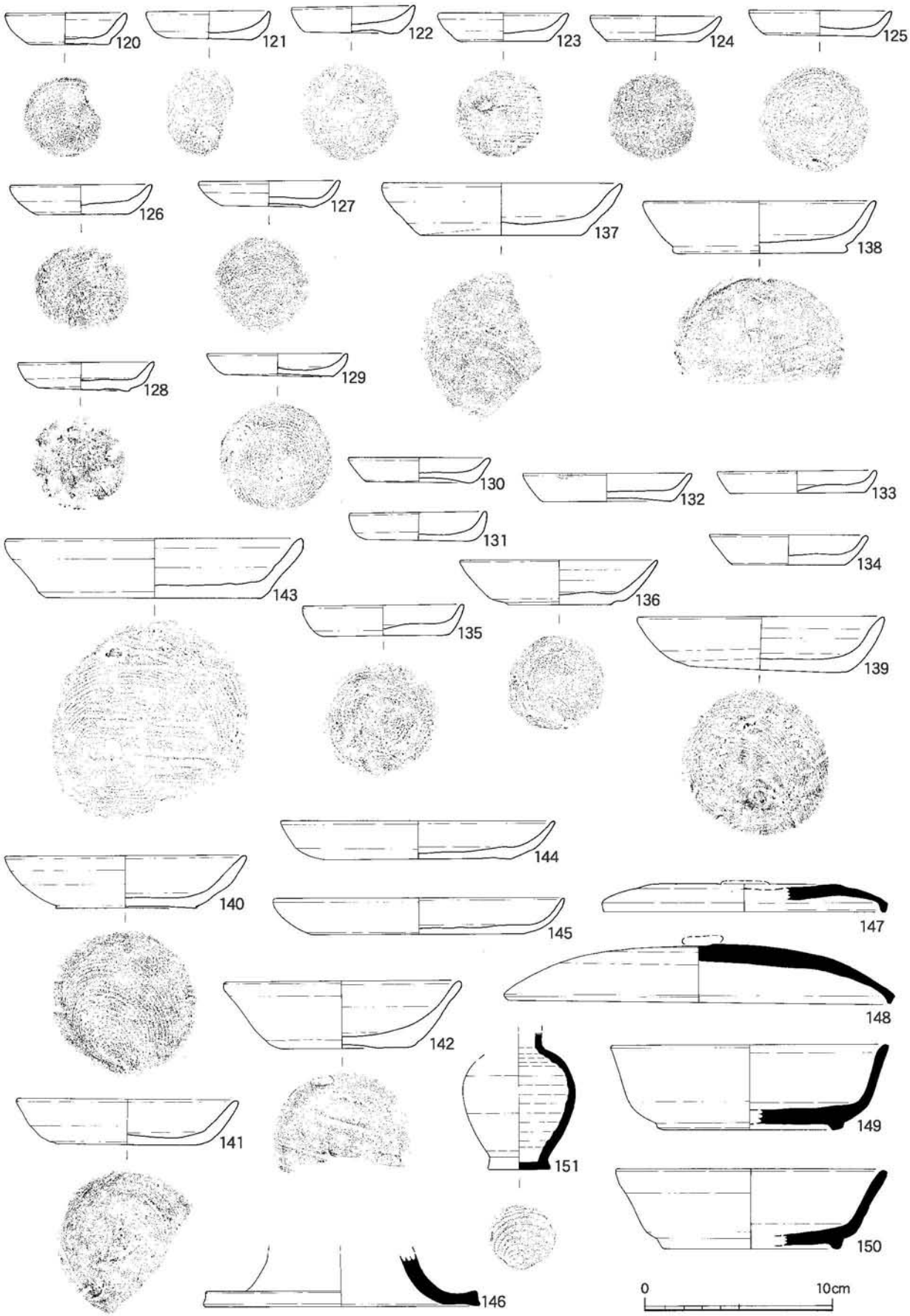

Fig.60　包含層出土遺物実測図３（1/3）

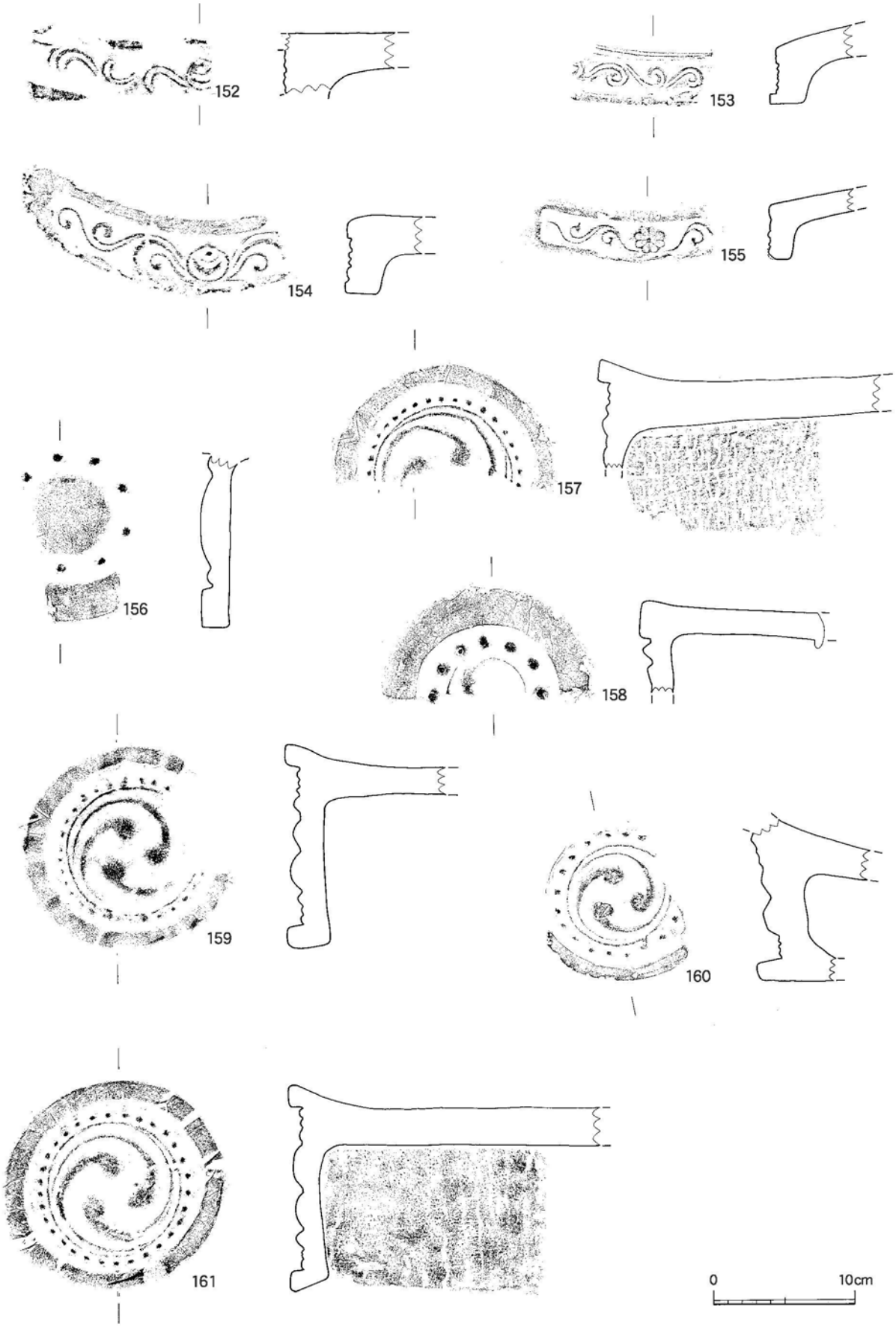

Fig.61　包含層出土遺物実測図４（1/4）

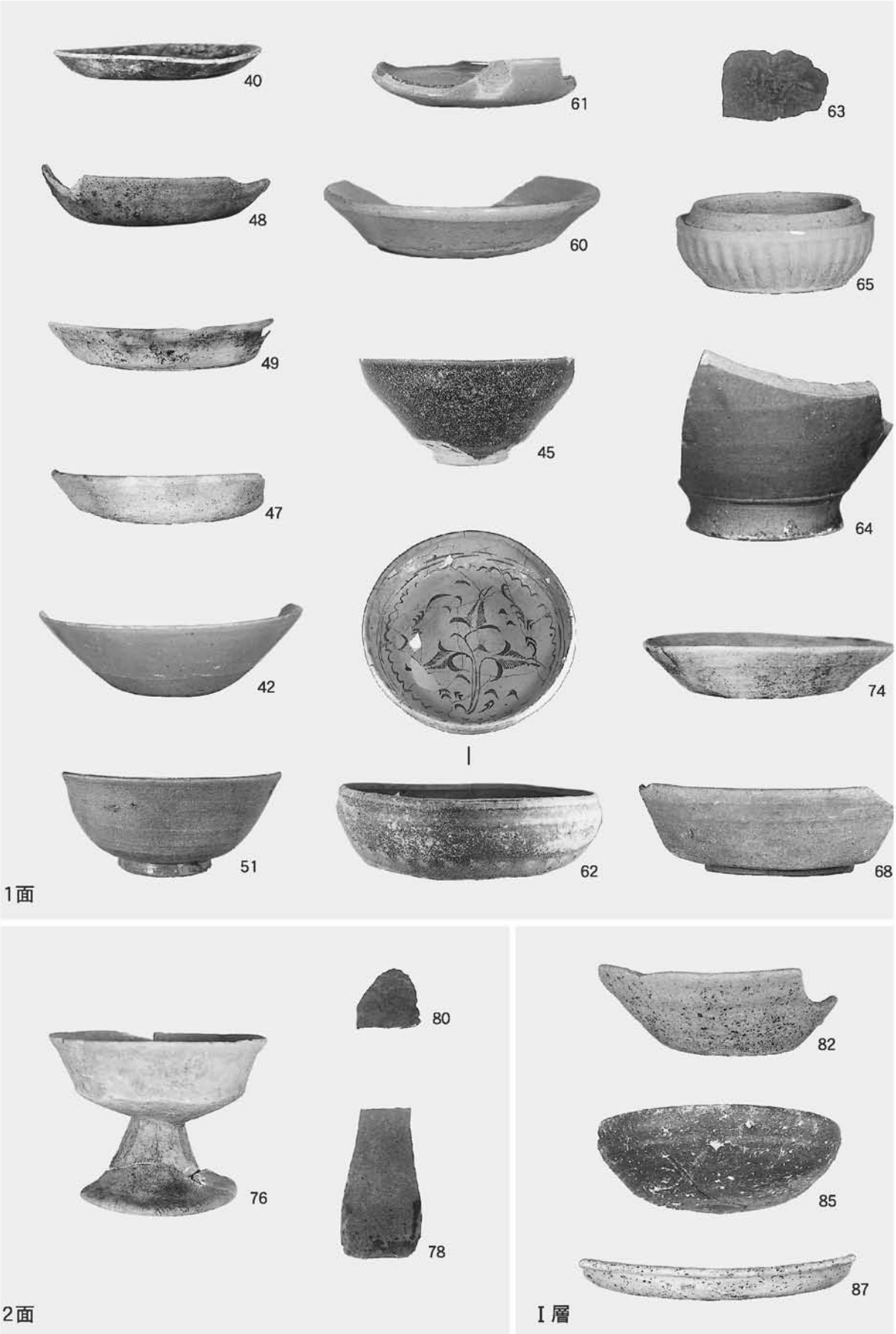

Fig.62　出土遺物 1 （縮尺不同）

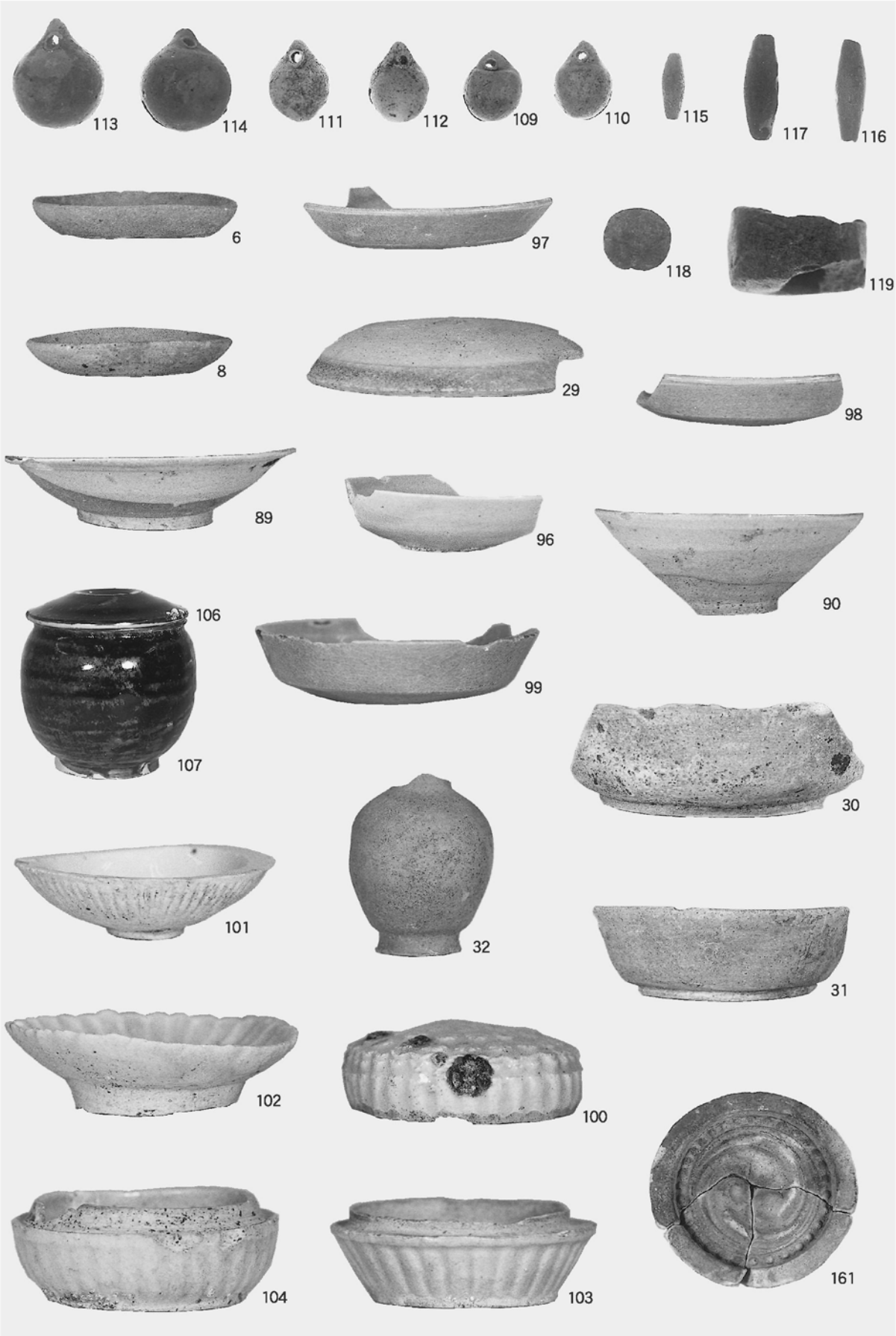

Fig.63　出土遺物 2 （縮尺不同）

（付論） 博多遺跡群第167次調査近世墓の副葬遺物について

福岡市埋蔵文化財センター　片多雅樹

博多遺跡群第167次調査地点では、近世墓の副葬品と思われる遺物が多く出土している。ここでは代表的な遺物について図版を示すと共に紹介する。文中の番号は表および図版番号と一致する。

銭は138枚出土している。数枚が錆によって銹着しているものは、布などの付着が認められるものを除き、可能な限り剥離し銭銘を解読したところ渡来銭は６枚のみであり、そのほとんどが寛永通寶であった。銹着しているものでは６枚組のものが目立ち、多いものでは12枚が連なって出土したものが２例見られる。５枚や７枚のものもみられるが、これらはいわゆる「六道銭」として副葬されたものと考えられる。寛永通宝は、寛永13年（1636年）に創鋳、幕末まで鋳造されており、万治２年（1659年）までに鋳造されたものを古寛永と呼び、製法が改良された寛文８年（1668年）以降に鋳造されたものを新寛永と呼ぶ。また、背に寛文の「文」を鋳出すものは通称「文銭」と呼ばれており、銭一覧表（Tab.1）では判読できたものに関しては「古寛永」「新寛永」「文銭」の３種類に分けて示した。Fig.1に剥離した銭１の拓本および２～６のＸ線写真を示す。Fig.6の11～14は５～６枚の銭が銹着しており更に表面に織物が付着したまま残存している。11、12、13には撚りのある糸で織られた平織り物が銹着している。また13には木製の櫛と鉄製の和鋏も銹着しており六道銭と共に副葬されたものと思われる。14には撚りのない糸で織られた織密度の高い平織り物が銹着しており、一部に金糸箔を織り込んだ布片も残る。そのほか特筆すべき銭としてFig.7の17-2は背に元を鋳る。「元」は、「寛保元年（1741年）」の「元」で、大阪の摂津で発行されたものである。21は背に「長」を鋳る。肥前長崎所鋳銭で、明和４年（1767年）初鋳である。41は鉄銭である。腐蝕が著しいが下部に永の字が判読でき寛永通寶の鉄銭であると考えられる。Fig.2,3の57と58は柄鏡である。57は全長28.5cm、鏡径18.4cm、重さ742gを量り、鏡背面には鶴２羽、亀１匹、松、竹と右端に『松村因幡守藤原重義』を鋳出す。58は折れた柄を直接つなげた状態で全長11.5cm、鏡径７cm、重さ46gを量り、鏡背面中央に梅花紋と右端に『天下一松村因幡守重義』を鋳出す。２面に鋳出された「松村因幡守」は、戦前に作成された「鏡師銘記集」にも記載されており、17～18世紀に京都にて鏡製作を行った鋳鏡師の銘であり、両面共に文様のない背景は「砂目地」と呼ばれるざらついた質感に仕上げられている。Fig.4の59～61は煙管の雁首部、62～65は吸口部である。66～71は銅製品で、66は管状製品、67と68は細長い板状を呈し先端が反っているため何かを引っ掛ける道具と思われる。69は匙状製品、70は鏡の破片、71は板状製品の縁部である。Fig.5の72～77は鉄器で、釘や釣り針がみられる。Fig.8の78は骨製と思われる管状製品で用途は不明である。79は木製の数珠である。80と81は櫛である。いずれも乾燥変形している。Fig.9の82は赤色顔料の塊で、分析の結果水銀（Ｈｇ）と硫黄（Ｓ）を検出したため水銀朱であることが分かった。Fig.10の83は長辺15mmほどの砂岩様の小さなかけらだが、片面にガラス質の融着がみられる。ガラス質部の分析では、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カルシュウム(Ca)、カリウム(K)が検出され、ソーダ石灰ガラスといえ、そのほかのマンガン(Mn)、鉄(Fe)などは発色成分と考えられる。

最後に、貴重な資料の調査報告の場を与えてくれた発掘調査担当者の小林義彦氏に末尾ではあるが感謝申し上げたい。本来であれば図化すべきところを怠ってしまったが、今後の近世博多の研究の一助となることを願う。

≪参考文献≫　郡司育夫編1981『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社
櫻木晋一1997「九州の近世墓と六道銭」『近世の出土銭Ⅰ－論考篇－』兵庫埋蔵銭調査会
久保智康1999『中世・近世の鏡』日本の美術３ 至文堂

Tab.1　包含層出土銭一覧

No.	銭　銘	備　考
1－1	寛永通寶	(新)、背文
1－2	寛永通寶	(新)、背文
1－3	寛永通寶	(新)、背文
1－4	寛永通寶	(新)、背文
1－5	寛永通寶	(新)、背文
1－6	寛永通寶	(新)、背文
1－7	寛永通寶	(新)
1－8	寛永通寶	(新)
1－9	寛永通寶	(古)
1－10	寛永通寶	(古)
1－11	寛永通寶	(古)
1－12	嘉祐通寶	北宋（1056年初鋳）
2－1	寛永通寶	(新)、背文
2－2	寛永通寶	(新)
2－3	寛永通寶	(新)
2－4	寛永通寶	(新)
2－5	寛永通寶	(新)
2－6	寛永通寶	(新)
2－7	寛永通寶	(新)
2－8	寛永通寶	(新)
2－9	寛永通寶	(古)
2－10	寛永通寶	(古)
2－11	寛永通寶	(古)
2－12	寛永通寶	(古)
3－1	寛永通寶	(新)、背文
3－2	寛永通寶	(新)
3－3	寛永通寶	(新)
3－4	寛永通寶	(古)
3－5	寛永通寶	(古)
3－6	寛永通寶	(古)
4－1	寛永通寶	(新)、背文
4－2	寛永通寶	(新)、背文
4－3	寛永通寶	(新)、背文
4－4	寛永通寶	(新)、背文
4－5	寛永通寶	(新)、背文
4－6	寛永通寶	(新)、背文
5－1	寛永通寶	(新)、背文
5－2	寛永通寶	(新)、背文
5－3	寛永通寶	(古)
5－4	寛永通寶	(古)
5－5	寛永通寶	(古)
5－6	寛永通寶	(古)
6－1	寛永通寶	(新)、背文
6－2	寛永通寶	(新)
6－3	寛永通寶	(新)
6－4	寛永通寶	(古)
6－5	寛永通寶	(古)
6－6	寛永通寶	(古)
7－1	寛永通寶	(新)、背文
7－2	寛永通寶	(古)
7－3	寛永通寶	(古)
7－4	寛永通寶	(古)
7－5	□□□□	
7－6	□□□□	
7－7	□□□□	
8－1	寛永通寶	(新)、背文
8－2	寛永通寶	
8－3	寛永通寶	
8－4	天禧通寶	北宋（1017年初鋳）
8－5	□□□□	
8－6	□□□□	
9－1	寛永通寶	(新)
9－2	寛永通寶	(古)
9－3	□□□□	
9－4	□□□□	
9－5	寛永通寶	(新)
10－1	□□□□	
10－2	□□□□	
10－3	□□□□	
10－4	□×××	1/4

No.	銭　銘	備　考
11－1	6枚錆着（現状維持）	布付着
11－2	6枚錆着（現状維持）	布付着
11－3	6枚錆着（現状維持）	布付着
11－4	6枚錆着（現状維持）	布付着
11－5	6枚錆着（現状維持）	布付着
11－6	6枚錆着（現状維持）	布付着
12－1	5枚錆着（現状維持）	布付着
12－2	5枚錆着（現状維持）	布付着
12－3	5枚錆着（現状維持）	布付着
12－4	5枚錆着（現状維持）	布付着
12－5	5枚錆着（現状維持）	布付着
13－1	5枚錆着（現状維持）	布・櫛・和鋏付着
13－2	5枚錆着（現状維持）	布・櫛・和鋏付着
13－3	5枚錆着（現状維持）	布・櫛・和鋏付着
13－4	5枚錆着（現状維持）	布・櫛・和鋏付着
13－5	5枚錆着（現状維持）	布・櫛・和鋏付着
14－1	5枚錆着（現状維持）	布（金糸箔含）付着
14－2	5枚錆着（現状維持）	布（金糸箔含）付着
14－3	5枚錆着（現状維持）	布（金糸箔含）付着
14－4	5枚錆着（現状維持）	布（金糸箔含）付着
14－5	5枚錆着（現状維持）	布（金糸箔含）付着
15－1	寛永通寶	(新)、背文
15－2	寛永通寶	(新)、背文
15－3	寛永通寶	(新)、背文
16－1	寛永通寶	(新)、背文
16－2	□□□□	
16－3	寛永通寶	
17－1	寛永通寶	(新)、布付着
17－2	寛永通寶	(新)、背元
18	寛永通寶	(古)
19	寛永通寶	(古)
20	(寛) 永通 (寶)	(新)、 2/4
21	寛永通寶	(新)、背長
22	寛永通寶	(新)
23	寛永通寶	(新)
24	寛永通寶	(新)
25	寛永通寶	(新)
26	寛永通寶	(新)
27	寛永通寶	(新)
28	寛永通寶	(新)
29	寛永通寶	(新)
30	寛永通寶	(新)
31	寛永通寶	(新)、背文
32	寛永通寶	(新)、背文
33	寛永通寶	(新)、背文
34	寛永通寶	(新)、背文
35	寛永通寶	(新)、背文
36	寛永通寶	(新)、背文
37	寛永通寶	(新)、背文
38	寛永通寶	(新)、背文
39	寛永通寶	(新)、背文
40	寛永通寶	(新)、背文
41	(寛) 永 (通寶)	鉄銭
42	寛永通寶	
43	寛永通寶	木質付着
44	寛永通寶	
45	寛 (永通) 寶	2/4
46	(元) 豊通 (寶)	2/4、北宋（1078年初鋳）
47	紹聖元寶	星孔、北宋（1094年初鋳）
48	永樂通 (寶)	3/4、明（1408年初鋳）
49	永 (樂) 通 (寶)	2/4、明（1408年初鋳）
50	□□□□	
51	□□□□	粗悪銭
52	□□□□	鉄銭
53	□□××	2/4
54	□□□□	
55	□□□□	
56	□□□□	小型

計138枚□：判読不能、×：欠損、()：□又は×だが限定できる。
枝番は銹着していたものを表す。

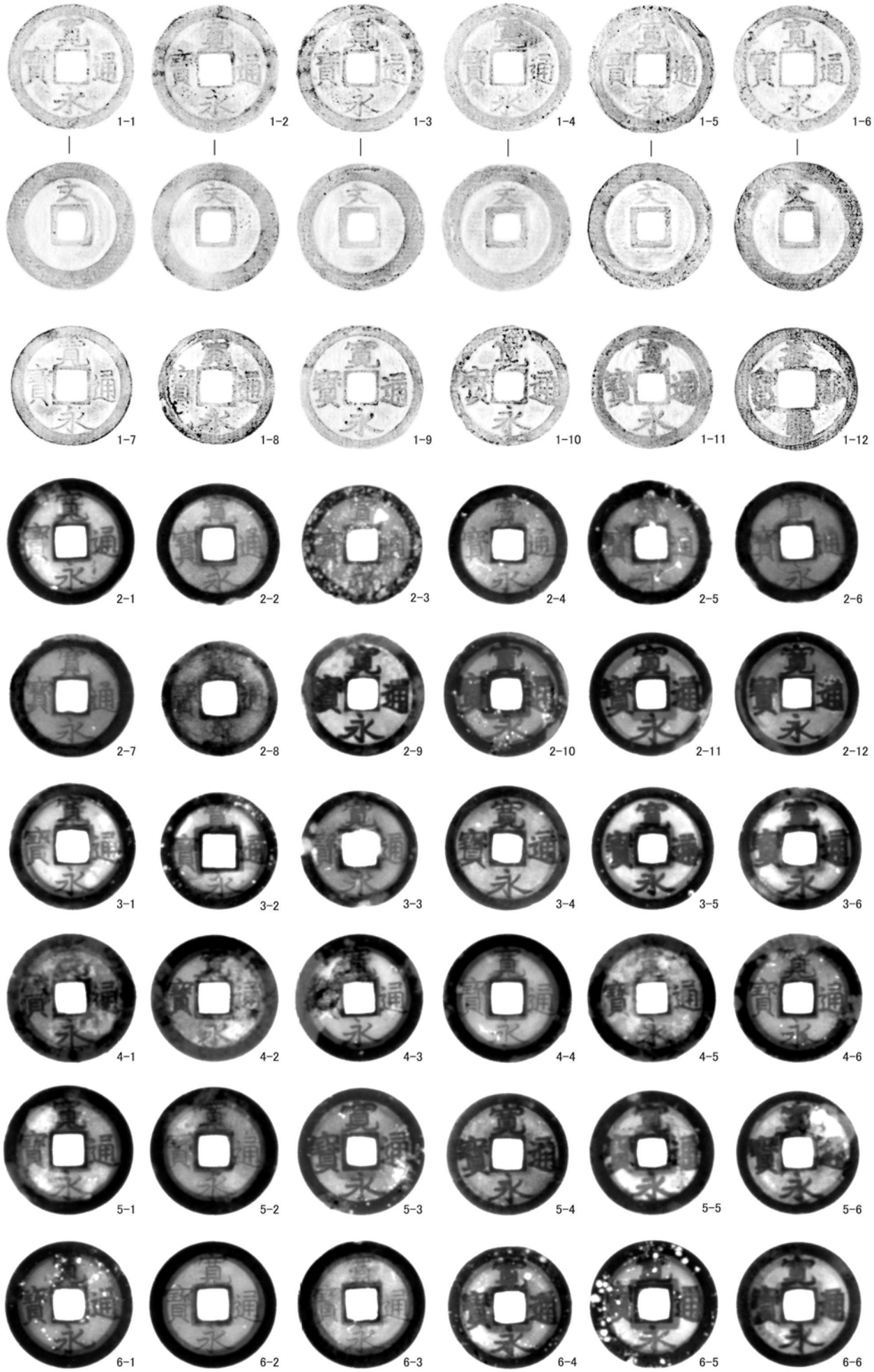

Fig.1 出土銭の拓影または透過X線写真

Fig.2 柄 鏡

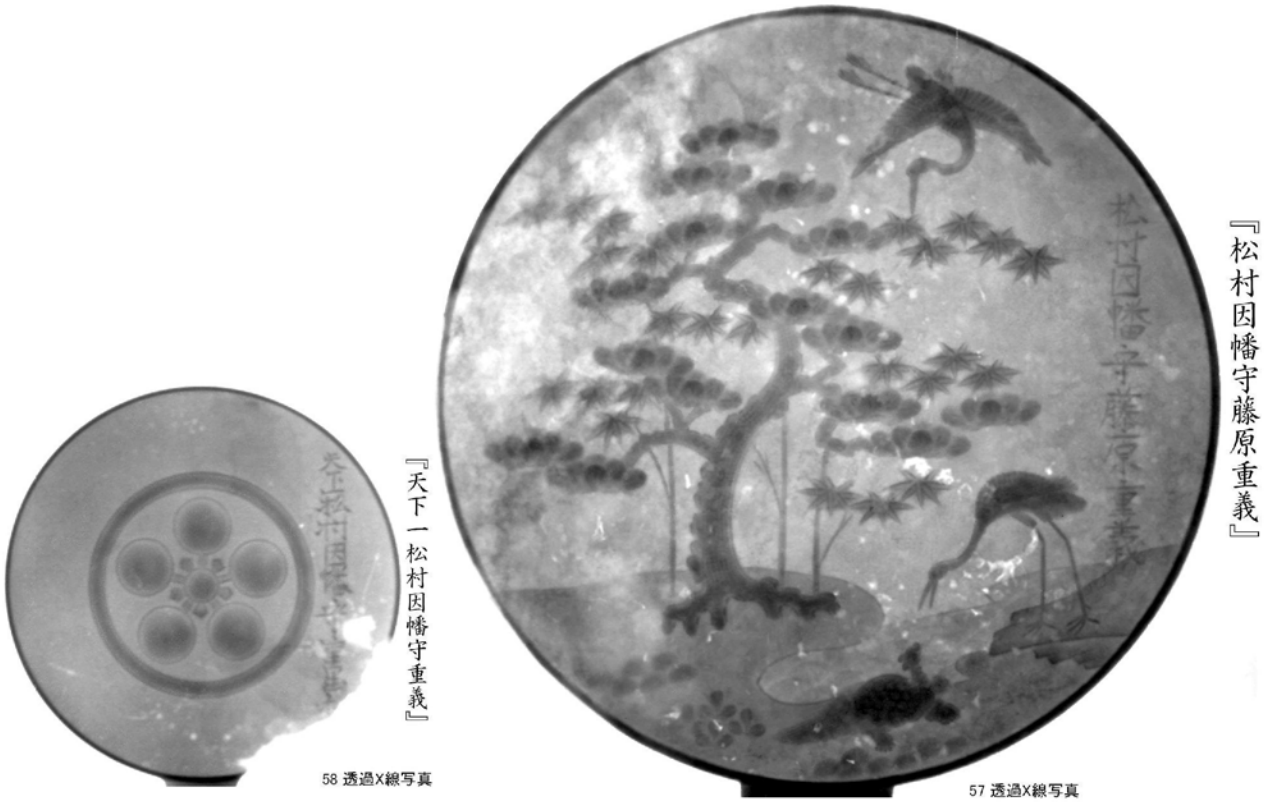

Fig.3 柄鏡の透過X線写真（縮尺不同）

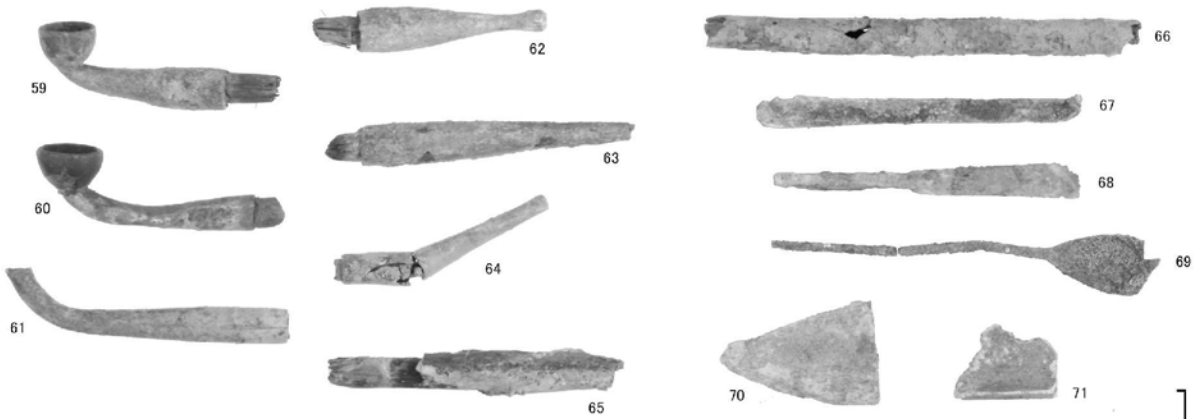

Fig.4 煙管とその他の銅製品

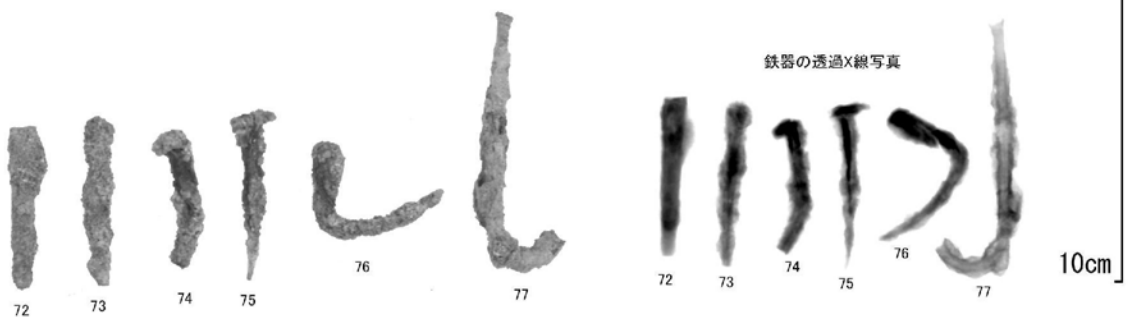

Fig.5 鉄器とその透過X線写真

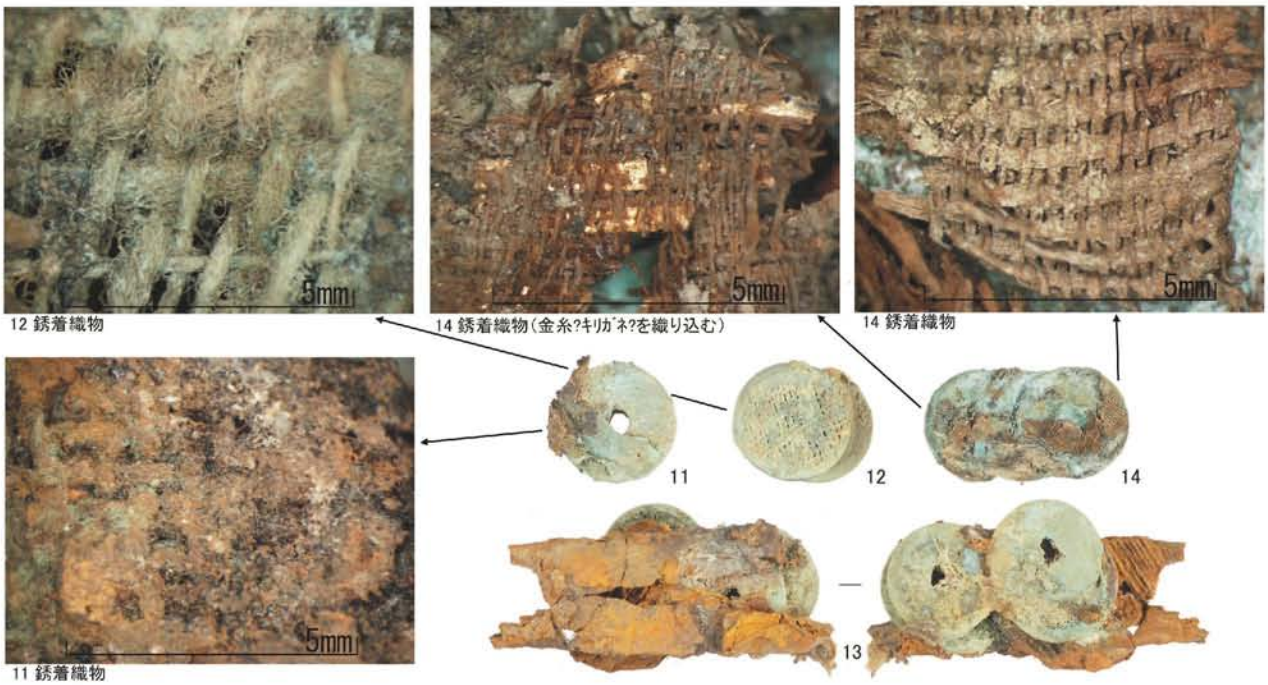

Fig.6 銭に銹着残存する織物片の顕微鏡写真

Fig.7 寛永通寶

Fig.8 その他の遺物

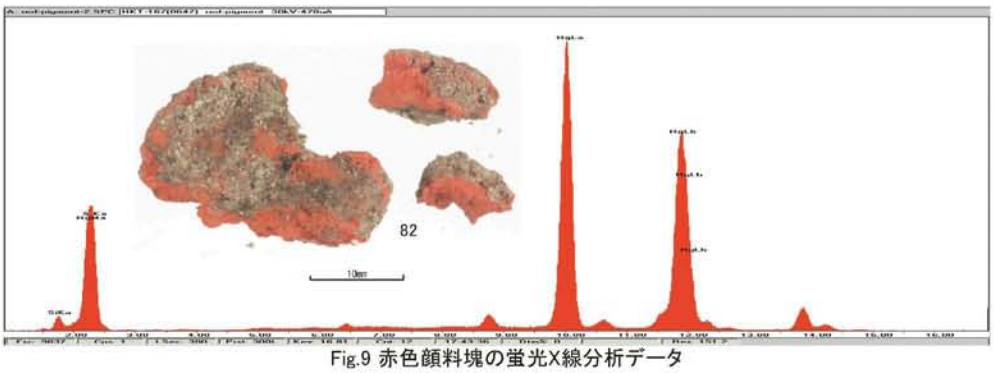

Fig.9 赤色顔料塊の蛍光X線分析データ

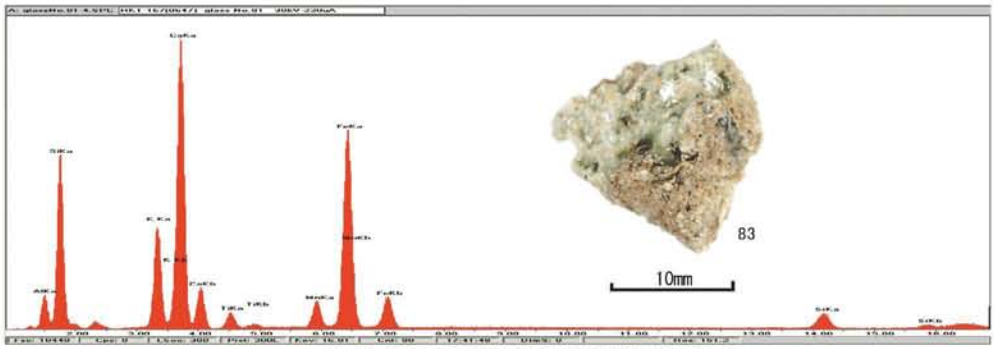

Fig.10 ガラス質融着小塊の蛍光X線分析データ

報　告　書　抄　録

ふりがな	はかた
書名	博多124
副書名	博多遺跡群第167次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第994集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
博多(はかた)遺跡群	福岡市(ふくおかし)博多区(はかたく) 博多駅1丁目 176－1	40130	0647	33° 35′ 42″	130° 24′ 57″	20061020 ～ 20070124	288 (3面)	納骨堂建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第167次	集落 墳墓	古墳～中世 近世	住居跡　土壙　井戸跡 近世墓	土器　陶磁器 鉄製品　銅製品 石製品　土製品 銅銭　漆器碗	

博　多　124

－博多遺跡群第167次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書994集

2008年（平成20年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印　刷　㈱川島弘文社